

41587

教科書文庫

4
810
41-1922
20000 80460

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

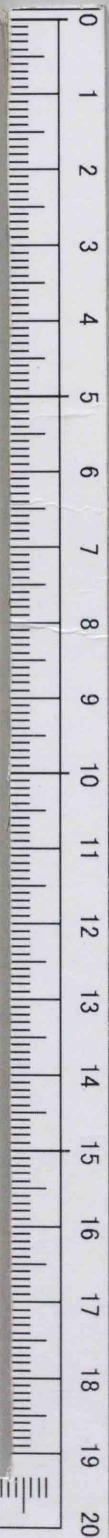
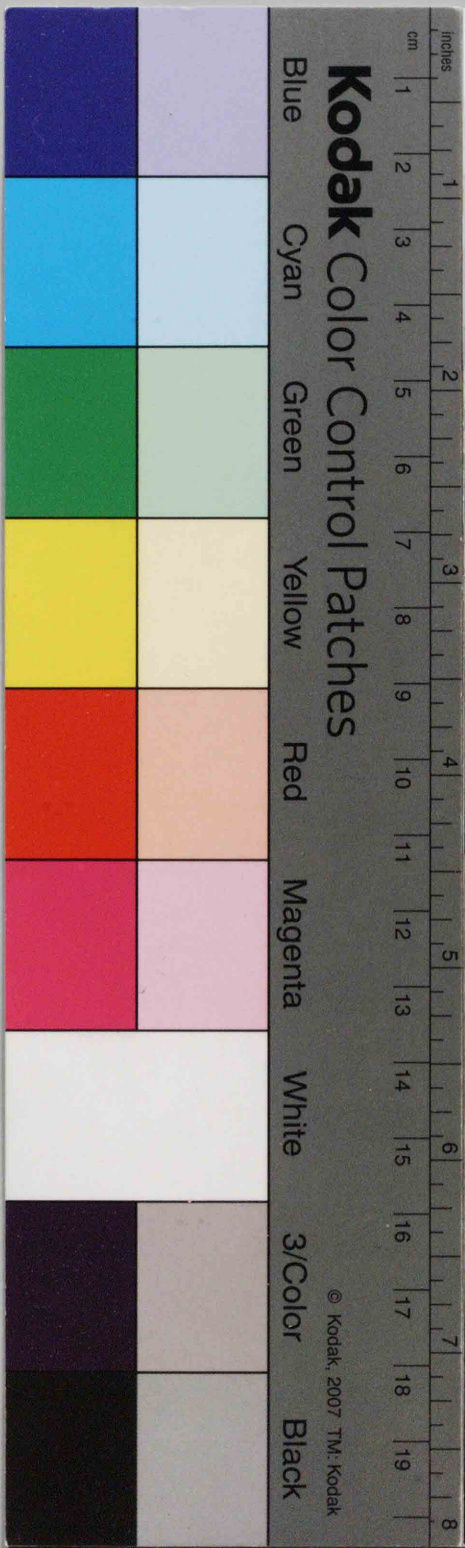


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
大II

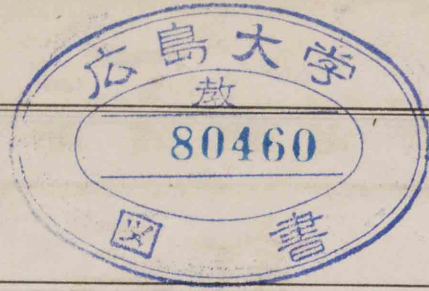
三訂 帝國讀本

五



42
810
大11

日三十二月一年一十正大
濟定檢省部文



文學博士芳賀矢一編

訂三帝國讀本

東京

合資會社 富山房發行

訂三帝國讀本 卷五日次

- 一 京都御所拜觀の記……………一
- 二 舊藩の明君……………五
- 三 人の脚……………四
- 四 吉野の行宮……………一九
- 五 藩生君平と小澤蘆庵……………二五
- 六 神國の首都……………三三
- 七 小泉先生……………三九
- 八 源九郎義經 其の一……………四七
- 九 源九郎義經 其の二……………五一

目次

一〇	源賴朝論	五
一一	狂歌	五
一二	大日本國語辭典の序	六一
一三	仁和寺の法師	六七
一四	夏のさまざま	七二
一五	大鳴門の眺	七六
一六	長江溯航	八四
一七	元寇其の一	九二
一八	元寇其の二	九五
一九	殉難志士の詩歌	一〇〇
二〇	阿新丸其の一	一〇五
二一	阿新丸其の二	一一一

二三	實體實相	一一九
二四	日蓮上人其の一	一二三
二五	日蓮上人其の二	一二六
二六	百花譜	一三三
二七	三つの眺其の一	一三六
二八	三つの眺其の二	一四〇
二九	博雅の三位	一四四
自修文		
一	書齋	一
二	吉野と嵐山	三
三	運命	六



四	ハンニバル……………	三
五	熱帯の海……………	一九
六	帝國青年のために……………	二四
七	西郷南洲遺訓……………	二七

卷五目次終

三訂帝國讀本 卷五

一 京都御所拜觀の記

殿掌
 踏む足も空
 里内裏

京都御所を拜觀したる時程、神々しかりし事はなし。我が拜觀したるは四月半ば頃なりしが、殿掌なる人に導かれて、彼處此處廻るに、麗かなる都の春は、唯此の九重の中に籠れるが如く、踏む足も空にて、人間の世界を出でたる様なり。私かに承るに、皇居は初より此處にありしに非ず。平安朝の末より、折々の里内裏となり、今より五百餘年前より此處に定まりしなり。百十餘年前天明の大火後、幕府勅命を受け、

儼然

紫宸殿
清涼殿
故實

老中松平定信に命じて、新に造營の工を起す。從來略式にのみなり行きし皇居も、此の時より儼然として舊制に復したり。然るに安政元年また火災に遭ひ、更に造營の工事あり、概ね定信が定めし式に従はしめられたる、即ち今の御所ぞかし。紫宸殿、清涼殿等は定信が深く故實をたゞし、平安朝の舊制に復せしものなり。今の御所も亦之に倣へるものにして、千年の昔を眼のあたり見る心地す。

節會

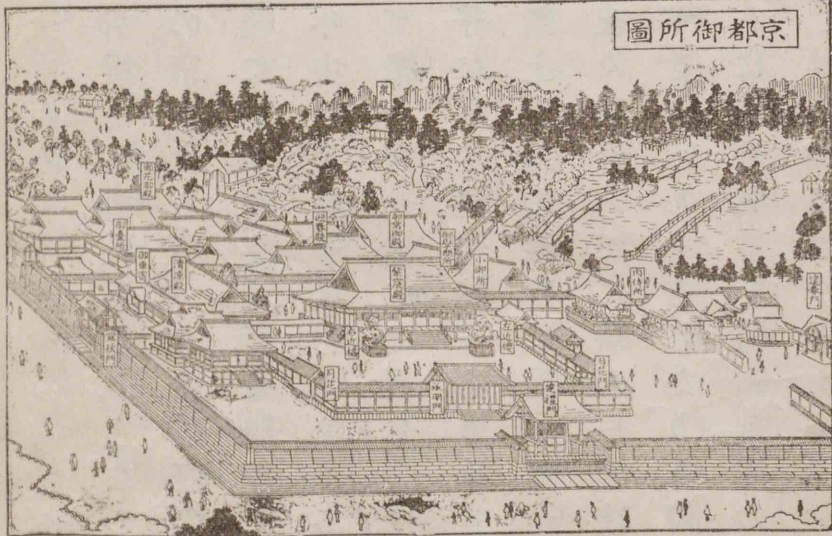
紫宸殿は皇居の正殿にして南面し、其の前に南庭あり。階前の左右に左近櫻、右近橋の二本の樹ある外は塵も止めず。今は春の日の、一面に敷詰めたる砂を射て、眩きはかりなるが、元日の節會に、ほのぼのと明けはなれたる初日の光など、いかにめでたからんと覺ゆ。殿は廣き一面の板敷にして、中

聖賢障子

(一)有名なる畫家。清和、陽成、光孝、醍醐の五朝に多し。官納言に至る。

世移り風變る

京都御所圖



京都御所全景

に唐代の賢臣を畫がける襖あり。所謂聖賢障子にして、昔は巨勢金岡の筆になれるものなりきといふ。明治天皇も、今の天皇陛下も、此處にて御即位の式を擧げ給ひしなり。清涼殿は昔は主上の御居間なりしが、世移り風變りては、日常の御起居に適せずなりて、近世は唯上古の形を存したるなりと申

母屋
塗籠
殿上人

年中行事

(一)支那雲南省雲南。

す。正面の母屋に晝の御座あり、御帳臺を立つ。傍の塗籠は、夜、御殿として御寢所なり。左右の別室、一方を殿上といひ、殿上人の宿直する所。一方に藤壺の上局、萩の戸、弘徽殿の上局あり。後に朝餉間、臺盤所、鬼間等あり。前の廣廂に立てたる衝立に、年中行事、障子、昆明池、障子あり。一は年中行事の次第を記して、殿上人が備忘に供し、一は漢の昆明池(一)を畫かく。昆明池、障子に近く荒海、障子あり。手長、足長が魚を捕ふる圖を畫かく。殿上の外の渡廊に馬形、障子あり。上古のは金岡の筆にして、夜々脱けいでて、萩の戸の萩を食ひしかば、勅ありて轡を畫がき加へしめられたりと傳ふ。清涼殿は東面にして、階前左右に河竹、吳竹を植ゑ、御溝の水其の側を流る。

其の他には小御所、御學問所、常御殿等あり。何れも近世の

林泉の巧

(一)賀茂川の一名。

堰入る

一眸の中に入る

(二)比叡山の一支峰。

様式なり。小御所、御學問所は謁見など仰せつけらるゝ所、折により拜謁者の階級によりて、此處彼處の別あり。常御殿は即ち主上の御居間と申す。其の東の御庭、林泉の巧いふばかりなし。蟬(一)の小川を堰入れて池を湛へ、池邊には花木を植ゑて四季の眺絶えず。東山一帶、亦一眸の中に入る。殊に彼方の木立少し切下げたるは、如意嶽の大文字の火を望み給はんが爲とぞ。

一わたり拜觀したるばかりにて、よくは覺えず。九重の雲深き御あたりの事を書出づるも畏しや。

二 舊藩の明君

徳川時代三百藩は、各其の土地人民を領して、一々別國の

堵に安んず

觀を呈してゐたが、いづれも學者を聘し、賢者を擧げ、學問を勸め、産業を起し、出来るだけの善政を布いて、封内の人民をして、其の堵に安んぜしむる様にと苦心した。鎖國の二百六十餘年間は、かくして太平無事の世であつた。上下の階級がやかましく、職業世襲の制度で、技能材幹あるものの新進の道は十分に開けて居らなかつたが、四民皆其の分に安んじ、其の業を樂しんで、何等の不平等もなく、安穩な生活を營んで居つた。凡そ世界の歴史で、これほど安樂な時世は無かつたらうとさへ、或外國の史家は言つた。

實踐躬行
齊家
治國平天下

大學、中庸、論語、孟子の四書は忠孝の道を訓へる儒教の經典で、武士は之を學んで、實踐躬行の標準とした。いづれも齊家を本として、治國平天下の大道を教へたので、個人の修徳

進講

から社會の改善に進まうとするのである。孟子の書には殊に人君たる道、人民を治める道を説いた文章が多い。君主は天に代つて人を治めるので、君徳の無い者は君主たる資格が無いといふ支那思想が、其の根本になつて居る。各藩の藩主は皆それを自分の事として、徳を修め、治に勵むことに工夫した。各藩の儒者は皆此の旨を以て主君に進講したのである。間、暗君で民を虐げたものも無いではないが、概しては各藩に賢明な主君があつて、民衆の福利を圖つたのである。各藩の藩祖には明君と稱へられた人が多く、各其の遺訓を子孫に傳へて居り、歴代の主君は亦皆藩祖の遺訓を守つて、ひたすら其の家門を辱めまいと考へて居つた。今各藩主の顯著な治績に就いて其の二三を記さう。

聖堂
釋奠

徳川義直は家康の第九子で、尾張名古屋の藩祖である。慶長十二年始めて尾張に封ぜられ、十四年名古屋に城を築いて之に居り、慶安三年五十一歳で歿した人である。此の頃は戦亂が纔かに息んだばかり。人々は武藝を修めるばかりで、諸藩ともに學政に心を傾ける人は少かつた。義直は此の時に於て、儒教を尊奉し、聖堂を建て、釋奠の祭を行ひ、經籍も多く集めて、盛に藩中の學問を奨勵した。文教に於て、實に諸藩に率先したのであつた。尾張の敬公といふのは此の人で、明治三十三年正二位の贈位があつた。

紀州和歌山の藩祖頼宣は義直の次の弟で、家康の第十子である。大阪の冬の陣に、十三歳の初陣をした人で、智略もすぐれて居つたから、殊に家康に鍾愛せられた。夏の陣に軍功

堪能

の無いのを悲しんで、「十四歳は再び來らず」と言つたのは、名高い話である。武勇ばかりではなく、文事をも好んで、詩歌にも堪能で、學者を登庸して、よく其の諫を容れた。或時藩吏の



徳川光圀

某々等が、諸處の土地を開拓して新田を作ること願つた。頼宣は之を聞いて、「我が領分の中には、あまたの名所舊跡があつて、累代の歌集にも載つてゐる。汝等唯實利

をのみ圖つて、天下後世の物笑になるな」と言つたので、其の事はやめになつた。

頼宣の同母弟頼房が水戸の藩祖で、其の第三子が有名な光圀である。忠孝の志も厚く、仁慈の徳にも富んで居つて、種

偉勳

陸叙

種な善政を施したが、就中後代までも其の偉勳を留めたのは、學者を集めて大日本史の編纂に着手した事である。それが爲に藩祿の半分を割いてあてたのである。國體論、尊王論の根ざしはこゝに生じたので、光圀の修史事業が、遠く明治維新の原因をなして居るのである。明治二年從一位の贈位があつたが、同三十三年には更に正一位に陞叙せられた。池田光政は輝政の孫で、初め因幡伯耆を領したが、後備前の岡山三十二萬石の主となつた。少年の頃の夜食は茶漬に焼味噌のみであつたといへば、其の儉素の程も知られる。後熊澤蕃山を用ひて庶政を改善した。其の語に、人に下り、目の前の事をも人に尋ね相談して善を取る所、儉約の第一なり。衣服、家作等は儉約の枝葉たるべきものなり。」と言つたのを

人言を容る

見れば、如何に其の人言を容れるのに工夫したかが分る。或時封内の農甚助といふ者が、親孝行の廉で褒賞を得た。それを羨んで、甚助の隣のものが、其の眞似をしたところ、光政は同じくこれにも褒賞を與へた。或役人、彼は似せもので御座います。」と言ふと、光政、似せでもよい。孝行を勵むがよい。」と言つたさうである。

加賀百萬石の前田家の第五代の主君を綱紀つなとせといつた。三歳で父の後を繼いで、八十二歳で死ぬまで、七十九年間在職したのも珍しい事である。藩政を改革し、學問を奨励した事蹟は一々擧げるに違が無い。其の領土加賀、越中、能登の三箇國の獄屋が全く空虚であつたといふのでも、其の政治の行届いた有様が知られよう。徳川光圀が「嗚呼忠臣楠子之墓」と

徳憑

いふ碑を湊川に建てたのも、此の綱紀の徳憑に基づいたのだといふ。

上杉鷹山、名は治憲、米澤の城主である。學問を好み、學者を禮遇し、時々國中を巡視して、孝子を表彰することを怠らな



上杉鷹山

かつた。農業を奨める爲、自ら泥田の中に立つて、鋤を執り、家老以下をして之に倣はしめた事業もある。儉約を第一とし、種々産業を興すことを令したので、藩中の風儀も全く改つた。米澤織など今日の産物となつて居るのも、全く鷹山が勤勉の遺徳である。

熊本藩の賢君は細川重賢である。よく役人を抜擢して、適

用を適處に用ふ

大節

材を適所に用ひたので、學問も興り、士風も奮ひ、藩政も面目を一新した。天明年間の大饑饉の時の事であつた。勘定方の役人が重賢に向つて、今年は収入の減少が夥しいから、諸士の祿高を減らして、入用に立てたらば」と建議した。重賢之を聞いて、「大節に臨みて死を致すのは武士ではないか。武士の俸祿を減らしては、事に臨んで義氣の緩むこともあらう。減らすことは相成らぬ」と承知しなかつた。又米價が騰貴して、隣國では餓死者が頻に出来た程であつたが、重賢は國中に令して、米價の小賣直段を定めさせ、若し市中の米が皆無にならば、藏の米を出して補ふといふ事に定めたので、領内の米價は直ちに下落した。されば其の後參勤交代で東上する途中、豊後鶴崎まで三十里が間は、國中の人民が皆路ばたに

皆無

參勤交代

(一)大分郡の町。

跪いて感泣したといふ。

かういふ様な明君の事蹟は數限りも無く多い。徳川時代の昌平無事も、全く偶然の事柄では無かつたのである。

三 人の脚

大町 桂月

青年は走るものなり。壯年は歩くものなり。老年は坐るものなり。人餘りに幼ければ、這ふのみにて歩む能はず。餘りに老ゆれば、腰抜けて起つ能はず。

進取向上
力量

青年時代は精神の最も熾に發達しつゝある時代なり。進取向上の氣象に富む。記憶力も強ければ、想像力も強し。すべての事に進歩が早し。其の精神の活動を譬ふれば、走るなり。人は此の際に於て十分に力量を養成すべし。いはゆる自我

發展といふ事は、此の際に最も必要なり。一人前以上の價ありて、どこへ出ても引けを取らぬ様に努力して置かざるべからず。走るは可なれども、あせるべからず。あせらば頭が熱して、足元がお留守になるべし。ころぶべし。電信柱にぶつかるともあるべし。溝に落つることもあるべし。

人の身長、體格の發育の止る頃には、人格一通り出來てゐるなり。それより後、精神上の發達が全く止るものなり。發達するも徐々なり。其の精神の活躍を譬ふれば、歩くなり。走るやうには早からず。されど走れば、走ることゝ氣が取られて、左右を見まはすことも出來ず。歩けばゆる／＼見物がよくべし。此の際人は分別がつくものなり。腹をこしらへるは實に此の際にあり。自我發展といふことも依然として必要な

腹をこしらへる

亢龍の悔

るが、それを餘りに無鐵砲に、金力や權力に向つて求め過ぐれば、恐らくは亢龍の悔あるべし。

上れるだけ上れば、人は坐るの外なし。老人には概して精神上の進歩といふことなし。其の精神の活動の様を譬ふれば坐るなり。人によりては、此の際尊さを増すもあり、一向尊くならぬもあり。尊くならぬは薄つべらの人にして、尊くなるは深みのある人なり。人格も、才智も、徳器も、此の際に全く圓熟す。此の際の自我實現は眞の自我實現なり。銜氣なし、天真流露す。それも人物を磨きて浮世の風波を凌ぎてのことなり。青年時代の自我實現は、銜氣を免れず、空想も加る。自我實現の未成品なり。自我發展は己を磨き上ぐるといふ意に解すれば、いつにても可なり。自我實現は我をむきだしにす

銜氣
天真流露

未成品

常則

るの意に解すれば、徳器の成就するまでは考へものなり。數町の路ならば走らるべし。なほ進んで二三里の路も走らるべし。されど千里を通して走ることとは出來ざるべし。歩くは路を行くの常則なり。走るは可なる時もあり、不可なる時もあり。

意氣銷沈
健脚

朝宿屋を出づる時は非常に元氣にて、足の運びも早く、晩宿屋に就く時は意氣銷沈してびつこ引くやうになるは、これまだ旅なれぬ人なり。健脚家といふべからず。今日は威勢よく十二三里を行くも、明日は弱りて七八里となり、其の明日は更に弱りて五六里となるも、健脚家とはいふべからず。健脚家といふものは、一日歩くに朝も晩も歩行の速度同じなり。今日平氣で十里行けば、明日も平氣で十里歩き、明後日

も平氣で十里歩く。これを學問に應用しても、事業に應用しても、いはゞ確かなる人にて、絶えず進歩すべし。

平地は早く元氣に歩けても、山に登るには忽ちおそくなるものは、平地には慣れても、山路には慣れざる人なり。われ曾て奥州に遊びて、終日路なき山岳を跋涉せしことあり。其の土地にて山男と稱せらるゝ青年健脚の人に案内しても、らひたるが、其の人は常に山に登りて、附近數里の山岳其の足跡を印せざる隈もなく、一人にて米と鍋とを持ちて露宿しつゝ、數日間山中を歩きまはることも、少からざる由なり。其の歩きぶりを見るに、平地を行くも、山に登るも、榛莽をおしわけて嶮路を上下するも、谷川を涉渉するも、巖石を飛傳ひゆくも、足の速さに幾ど變りなし。さすがに慣れたるもの

足跡を印す

榛莽

徒渉す

達す
窮す

中堅

なりと感服せり。余は山中にては大いに歩き悩みしが、平地に出づれば余の方早し。其の人笑ひながら、貴下も案外足が弱くは無し。といふ。さきに余が山中にて歩き悩みしを、齒がゆく思ひしなるべし。世を渡るにも、此の人の歩くやうにこそあらまほしけれ。富に處しても、貧に處しても、安逸の境に居りても、千辛萬難にあひても、達しても、窮しても、上に立つても、下に使はれても、病みても、死に臨みても、いつも心に變りの無きは最も信任すべき人にして、又最も尊敬すべき人なり。社會は中堅としてかゝる人を要求す。 — ちび筆 —

(一) 延元元年五月。

四 吉野の行宮

(一) 五月にも成りぬ。

北 島 親 房

(一)足利尊氏。正平十三年(一二八〇)歿。年五十四。
相語らふ

(二)恒良親王。後醍醐天皇の第六皇子。延元三年(一九一八)薨。年十九。
(三)藤原實世。正平十三年(一二八〇)歿。年五十一。
(四)新田義貞。吉野朝の忠臣。延元三年(一九一八)戰死。年三十八。

内侍所

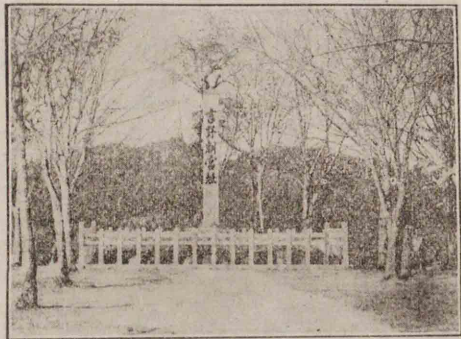
尊氏等西國の兇徒を相語らひて、かさねて攻上りぬ。官軍利無くして都に歸りまゐる程に、同二十七日復山門に臨幸し給ひけり。八月に至るまでたびく合戦ありしかど、官軍進まざりき。

十月十日の頃にや、主上山門より還幸。いとあさましかりし事どもなれど、なほ行末を思し召す道ありしにこそ。東宮は北國に行啓あり。左衛門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣を始めてさるべきつはものも數多仕うまつりけり。同十二月に忍びて都を出でましまして、河内の國に正成といひしが一族を召具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を造りて渡らせ給ひ、もとの如く在位の儀にてぞましましける。内侍所も遷らせ給ひ、神璽も御身に隨へ給ひけり。まことに

(一)源顯家。吉野朝の忠臣。北島親房の子。延元三年(一九一八)戰死。年二十一。
(二)義良親王。

(三)和泉國泉北郡。時や到らざりけん
(四)諸共に昔の下には朽ちずしてうづもれぬ名を見るぞ悲しき。(金葉集、和泉式部)

奇特の事にこそありしか。吉野の行幸に先立ちて、義兵を起す輩もありき。臨幸の後には國々にも御志あるたぐひ數多



吉野朝宮跡

聞えしかど、次の年も暮れぬ。

又の年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿また親王を先だて申し、かさねて打ちのほりぬ。海道の國々を悉く平げて、伊勢、伊賀を経て大和に入り、奈良の京になん着きにける。それより處々の合戦あまた度、互に勝負ありしに、同五月和泉の國石津といふ處にての戦に、時や到らざりけん。忠孝の道こゝにて極りにき。昔の下にもうづもれぬものとは、たゞ徒に名をのみぞ留めし。心うき世にもありしかな。

空しくさへ
なりぬ
いふばかり
無し

(一)源顯信。吉野
朝の忠臣。正
平中戦死。

節度
儲君

官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて、暫く合戦ありし
かど、朝敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事成らずして引退き
ぬ。北國なる義貞も、度々召されしかど上りあへず、させるこ
と無くて、空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかり無し。
さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子また東へ向は
しめ給ふべき定めあり。(一)左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位
に叙せられ、陸奥介鎮守將軍を兼ねしめて遣はされぬ。東國
の官軍悉くかの節度に從ふべき由を仰せられぬ。親王は儲
君に立たせ給ふべき旨申し聞かせ給ひて、道の程もかたじ
けなかるべし。國にてはあらはさせ給へ。となん申されし。異
母の御兄も數多ましましき。同母の御兄も、前東宮恒良親王、
成良親王ましますに、かく定まり給ひぬるも、天命なればか

おどろく
しく

(一)尾張國知多郡
の篠島。

(一)霞ヶ浦。

めづらか

たじけなし。七月の末つ方伊勢へ越えさせ給ひて、神宮に事
の由を啓して、御船のよそひし、九月の初め纜を解かれしに、
十日餘りの事にや、上總の地近くより空の氣色おどろおど
ろしく、海上荒くなりしかば、又伊豆の崎といふ方に漂はれ
たるに、いと波風夥しくなりて、數多の船ゆき方知らずな
りにけるに、皇子の御船のみは障なく伊勢(一)の海に着かせ給
ひぬ。顯信朝臣はもとより御船にさぶらひけり。同じ風の紛
れに、東をさして常陸の國なる内の海に來着きたる船あり
き。方々に漂ひしなかに、此の二つの船、同じ風にて東西に吹
分けられぬ。末の世にはめづらかなる例にぞあるべき。儲の
君に定まらせ給ひて、例無き鄙の御住居もいかゞと覺えし
に、皇大神の止め申させ給ひけるなるべし。後に吉野に入ら

こはし

(一)「寢るがうちに見るをのみをや夢といはん、はかなき世をもうつしとは見ず。」
(古今集、壬生忠岑)

(二)藤原經忠。正平七年(二〇一二年)薨。五十一。

せましまして、御目の前にて天位を嗣がせ給ひければいと
ど思ひ合せられて、尊くもありしか。又常陸は元より心ざ
す方なれば、御志ある輩相謀らひて、義兵こはくなりぬ。奥州
野州の守も、次の春重ねて下向して、各國に就きにき。
さても八月の十日餘り六日にや、秋霧におかされさせ給
ひて、隠れましましてぬとぞ聞えし。寢るがうちなる夢の世、今
に始めぬならひとは知りながら、かずく、目の前なる心地
して、老の涙もかきあへねば、筆の迹さへとこほりぬ。かね
て時をもさとらしめ給ひけるにや、前の夜より親王をば左
大臣の第にうつし奉られて、三種の神器を傳へ申されぬ。後
の號をば仰のまゝにて、後醍醐の天皇と申す。
昔仲哀天皇熊襲を攻めさせ給ひし時、行宮にて神去りま

(一)應神天皇。

しましきされど神功皇后程無く三韓を平げ、諸皇子の亂を
鎮められて胎中(一)の天皇の御代に定まりき。此の君聖運まし
まし、かば、百七十餘年中絶えにし一統の天下を知らせ給
ひて、御目の前にて日嗣を定めさせ給ひぬ。功も無く徳も無
きぬすびと世に起りて、四年餘りがほど宸襟を惱まし御世
をすぐさせ給ひぬれば、御怨念の末空しくありなんや。
今の御門また天照大神よりこの方の正統を受けましま
しぬれば、此の御光に争ひ奉るものやはあるべき。なか
かくて静まりぬべき時の運とぞ覺ゆる。——神皇正統記——

五 蒲生君平と小澤蘆庵 瀧澤馬琴

蒲生君平、山陵探求の爲に京に赴きし時、かの地に絶えて

(一)志士。下野國宇都宮の人。文化十年(二四年)薨。四十六。

(一)京都の歌人。享和元年(二四六一)歿。年七十九。世にすねたる隠逸

知る人なかりければ、便らん方もなくて困じ果てたり。時に小澤蘆庵は古學を好み、て萬葉風の詠歌に名高く、世にすねたる隠逸なりと聞きしかば、其の助を借らんとて、やがて蘆庵が宿所をおとなふに、そが僕出迎へて、「いづこより」と問ふ。伴りて、某は下野なる宇都宮の蒲生伊三郎といふ者なり。琴を好み候へども、田舎にはよき師なし。主人の翁は琴の妙手にておはする由聞傳へて、遙々と尋ね來つるにて候。といふ。僕は奥に赴きて、之を告げたるに、蘆庵は聲を高くして、「あな無益にも訪はるゝものかな。汝出でてしか答へよ。」主人は久しう客を辭し、交を絶ちたれば、都のうちだにも親しうものせるは稀なり。琴は若かりし時搔鳴したりけるを、遠近の人に知られて、かれに聽かせよ、これに教へよといはるゝがう

妙手

客を辭し交を絶つ

所望

つばらに

ものから

長者

わ殿

るさければ近頃うち擡きて薪に代へたり。かゝれば所望に従ふべくもあらず。他に求め給へ。』といへ。といふ。君平は、僕が報ずるをも待たず、翁の御答はこゝにもつばらに洩聞えたり。某なほ一言あり、願はくは枉げて聽き給へ。われは實は儒なり。しかゝの志願ありて都に上りつれども、相識れる者絶えてなし。翁の古學を好み給ふと、其の氣質の俗ならぬとはかねて傳へ聞きしものから、いひよる由のなきまゝに、『琴を學ばんとて來つ。』とはいひしなり。こは長者を欺くに似たれども、其の虚言は已むことを得ざるより出でたるなり。今一度わ殿を勞せん。此の由取次ぎ給へ。』といふ。蘆庵もこれを洩聞きて、さりとて思ひかけざりき。そは珍しき客人なり。對面せずば悔しきこともあらん。こなたへと申せ。』とて、やがて

他事もなく



蒲生君平

面を會せけり。君平深く歡びて、事の趣つばらに語り出づるに、蘆庵ひたすら感歎して「足下は得難き學士なり。さる志ならんには、我が庵に杖をとめて、こゝらあたりの陵を靜かに探求し給へ。」とて、また他事もなくもてなしけり。

これより君平は日毎に陵を訪ねめぐるに、ともすれば日暮れて歸るを、主人はいつも自ら風呂を焚きて、入浴せさするを例とせり。君平其の心づかひを心苦しとて辭みたれど、これらの事は、ひたすらに客を愛するのみならず、足下の如き國の爲に力を盡す人の疲勞を、聊かなりとも打慰めんの心の

更闌く

思ひ斟む

道草食ふ

非を飾る



小澤蘆庵

み。必ず辭み給ふな。」とて聽入れず。かゝりし程に、君平はある夜更闌けて、子二つの頃歸れるに、蘆庵はいまだいねず、例の如く入浴せさせ、飯をすゝめ、さていふやう、われ足下を宿せる日より、蔬菜の外に物もなく、させるもてなしをばせざれども、老僕は懋はせんとて、手づから風呂をさへ焚くを思ひ斟み給はずや。陵を訪ね巡ればとて、今までは用なからんに、道草食うてか、老人に物を思はせ給ふこと心得難し。」と呟く。君平聞きて容を改め、翁のうらみ理なり。我が非を飾るにあらねども、今宵かく更闌けたるは聊か故あり。懺悔のため笑に供へ

(一)臨濟宗。山城國葛野郡衣笠山の麓。
うらみ心頭に起る

梟臣

逆に取り逆に守る
干戈をさまらす

ん。今日は某の天皇の陵を訪ねたりしに、日暮るゝまで尋ねもあはで、思はずも等持院なる尊氏の墓を見たり。こゝに至りて、年頃のうらみ心頭に起りて堪へられず、墓に向つて罵るやう、『梟臣尊氏、靈あらば今いふ事を慥かに聽け。汝が一旦治りたる建武中興の世を亂して、逆に取り逆に守り、毒を後世に流し、より二百十數年、干戈をさまらず、國の舊典も爲に焼失せ、王室もこれによりて衰へ、歴代帝王の山陵すらもあとなくなりて、われらにさへ飽くまで物を思はするは、皆これ汝が罪なり。天罰思ひ知るべし。』とて、杖をもて石塔を思ふがまゝにうち敲きぬ。かくて寺門を出づる程に、物ほしうなりしかば、道の邊の酒屋に立寄り、怒に任せて飲みし程に、六七合を盡したりき。さて酒屋をば出でしかど、酔ひて足も

うまいやしけん

(一)京都洛東粟田の南。

(二)木下勝俊。秀吉の姻戚。慶安二年(二二三〇)九月、年八十一。

行きもえやらす

不滅の罪

(三)鬼胎を懐く。徳川氏の臣。慶長五年(二二六〇)伏見城を守つて戦死す。年六十。

一盲衆盲を引く

定まらず。此の儘にて歸らば必ず翁に叱られん。半ば醒して行かんと、株に尻をかけしより、うまいやしけん、驚き覺むればはや更闌けたり。』と語るに、蘆庵は呵々とうち笑ひ、(一)「世には似たる馬鹿者もあるものかな。我も去にし年、或日靈山の邊に逍遙して、長嘯子の墓所を過ぎし時、行きもえやらすにらまへて、長嘯子、不滅の罪あり。わぬし自ら之を知るか。わぬしは豊太閤の外族として位高く、采地も廣かるに、心さま武士に似ず。伏見の籠城に、敵の旗色に鬼胎を懐きて鳥居元忠等を棄殺にし、かつ事平きて後罪を蒙り、纔かに命を助けられしを幸にして、耻を知らず、心にもあらぬ世捨人顔して、えせ歌多く詠じたる。一盲衆盲を引きしより、歌の調のわろくなりて、今に至るまで直らぬは、これ不滅の罪にあらず

や。冥罰かくの如くならん。」と罵りながら杖を擧げて墓を毆ちたることありけり。こはよく似たるにあらずや。」と語りもあへず、聞きも終へず、齊しく腹を抱へたり。——兎園小説——

六 神國の首都

小泉 八雲

(一)島根縣の首府。

松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底でゆるやかな大きい脈が搏つやうに響いてくる米搗の音である。杵の落ちる響が一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の日常生活に伴ふあらゆる音響の中で、最も哀れに思はれる。米搗の音は日本といふ國土の脉搏である。

それから禪刹洞光寺の大きい鐘が、ごーんと響いて、市街の空を撼がせる。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から、

脈搏
禪刹

勤行

太鼓の淋しげな音が、晨の勤行を告げる。最後に行商人の物賣の聲、大根やい、蕪菁や蕪菁、「薪や薪」

萬象

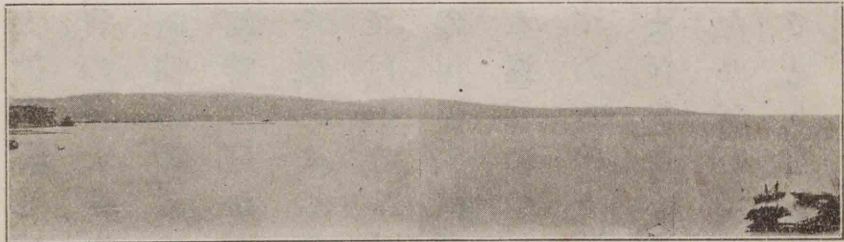
杳乎

明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の庭から伸びた春の若葉の軟な緑の雲越しに、朝景色を眺めやつた。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、わななくやうに萬象を映寫して、微かに光つてゐる。この川は尖道湖に向つて口を開き、湖は右手へ擴つて、杳乎たる連丘につままれてゐる。對岸の家屋は、まだ戸がみな閉つてゐるので、恰も箱を閉ぢたやうである。夜は明けたが、日はまだ出ない。遙かに見渡すと、薄色の霞が湖水の盡端に長くたなびいてゐる。その星雲状をした長い帯は、日本の昔の繪で見る通りであるが、實際の現象を眺めたことのないもの

盡端

奇を街ふ

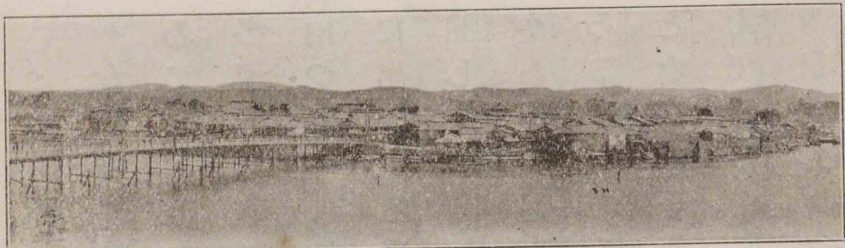
味爽



(一の其) 景全湖道穴

には、畫工が奇を街つたとしか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽うて、峰から峰へ、はて知らぬ長さの紗のやうに、横に延びてゐる。だから湖水は實際より遙かに大きく、味爽の空の色と入交つた美しい幻の海となつて見える。山々は霧の中に浮ぶ島嶼で、夢のやうな一帯の丘陵は、果てしのない土手道かと怪しまれる。そして霧が立つにつれて、その趣は坐ろに變つて行く。朝日の黄色な縁が見えてくると、今までのよりは更に強い、細やかな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱

蓬萊



(二の其) 景全湖道穴

い光を受ける。水のかなたにある高い建物の木地の色が、美しい靄の色で、蒸氣の立つ黄金色へと變る。
朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が、今しも帆を揚げんとしてゐる。こんな奇妙な恰好の美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢である。霞にぼやけた船の精靈である。併しこの精靈は雲と同様、光線を受けて、薄青い光の中で金色にふるへてゐる。
庭先の川端から、手を拍つ音が起つてくる。——一回、二回、三回、四回。その手の持主は植

埠頭

込に遮られて見えない。併し、對岸の埠頭の石段をおりる男や女の姿が見える。めい／＼に小さい青手拭を帯に挿んでゐて、顔と手を洗ひ口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に必ず行ふ潔齋である。それから顔を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。長い橋の上からも、他の拍手の音が反響の如くに出て来る。遠くにある軽い優美な、そして新月のやうに彎曲した小舟からも出てくる。この頗る異様な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黄金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の數が増して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が今皆朝日——お日様——天照大神を拜んでゐるからである。いとも貴き日の造り主よ。この心地よき日光を賜ひて、世界を麗しくなし給ふことを謝し奉る。言

衷心

(一) 杵築町にある
官幣大社出雲
大社

(二) 出雲國簸川
郡。松江市の
西方約六里の
山陰線今市驛
より山の下の
通ず。便鐵道
を

葉はこの通りでないまでも、これが無數の人々の衷心である。朝日に向つてだけ手を拍つ者もあるが、大概は西の杵築の大社(一)へ向つてもさうするのである。顔を東西南北へ向けて、群神の名を低聲で唱へる者さへ随分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山(二)の高峰を眺めて、盲人の眼を開き給ふ薬師如来の大伽藍のある處に向ひ、今度は佛教の儀式に隨ひて、掌を合せて軽く擦る者もある。併し日本で最古のこの國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰も彼も古風な神道の祈の文句を唱へる。祓ひ給へ、淨め給へ、とほ神ゑみため。

手を拍つ音が歇んで、一日の仕事が始り出し、橋の上には、から／＼といふ下駄の音が、だん／＼高く響いてくる。大橋の上で鳴る下駄の音は、忘れられない音である。速くて、陽氣

均整

で、音樂的で、盛な舞踏の音のやうである。實際又舞踏である
みんなが爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る數
へきれぬ人の足がちらくするのには、驚くべき光景である。
その足は皆細くて、恰好が均整を得てゐて、希臘の古甕に描
いた人物の足のやうに輕やかで、而して、足を運ぶ時、指を先
に下す。實際下駄では外にしやうがない。それは、踵は下駄に
も着かねば、地にも着かないし、足は楔形の木の臺を前へ傾
けては進むのであつた。一足の下駄の上に立つだけでも、慣
れぬ者には困難であるのに、日本の子供は三寸もある臺の
下駄を穿いて、親指と他の四本の指に挟んだ前緒だけで足
を固定させて、全速力を出して駈けて行く。それでも躓きも
せず、又下駄もぬげない。更に珍しいのは大人が木履で歩く

濶歩す

光景である。これは木の臺に高さ五寸もある齒が附いて、全
體の構造は、木製の長椅子の漆塗の標本かと思はれる。併し、
それを穿いた人は、まるで足に何もつけてゐないかのやう
に樂々と濶歩する。
やがて、學校へ急ぐ子供達が出てくる。彼等の駈ける時に、
綺麗な飛白の着物の濶い袖が波動すると、大きい蝶が羽搏
をするやうに見える。親船は白色や黄色の大きい翼を擴げ
るし、埠頭の側で夜中眠つてゐた小蒸氣船は、煙筒から煙を
吐き始める。

——まだ知らぬ日本の瞥見——

(一) 本名はラフカ
デーオ・ハ
ン(Lafcaidie
Hann)の
人。東京帝
國大學
文學部
教授。一
九一五年
五月。

七 小泉先生

厨川白村

「贈從四位小泉八雲」とかう書けば、知らない人は日本人か

Colis.

Ireland.

飄零の孤客

明治二十三年。

Harpers. 米國ニューオ
ルリンズの
書肆。

巨擘

と思ふだらうが、小泉先生の血管には、日本人の血は一滴も流れてゐなかつた。美しい神秘と空想との世界に生きるケルト民族の愛蘭人^(一)を父とし、昔歐洲の花やかな藝術と文明とを生出した希臘の國人を母とした純粹なる西洋人であつた。愛蘭に育ち、佛蘭西に學び、米國に人となつて、四海に家なき飄零の孤客であつた先生は、東海の果にありと傳ふる蓬萊の國に憧れて、今から三十年程前、始めて我が日本の國土に來られたのである。それはハーバース社の一通信員としてであつた。後、出雲に居られた時、歸化して小泉八雲と名乗られた。近代英文學史上に於ける散文の巨擘として、歐米の文壇には、先生のラフカディオ・ハーンといふ本名の方が轟き渡つてゐる。多少讀書の趣味を解し、或は苟も日本の存

在を知れる英米人にして、先生の名を知らないものは殆ど無からう。

日本を今日の如く西洋諸國に名高くしたのは、必ずしも



絢爛婉美

小泉八雲

數次の戦勝と國運の隆昌とのみではあるまい。これには先生の絢爛婉美の麗筆が與つて力ある事を思はねばならぬ。見給へ、唯觀光を目的として來朝する英米人の十中八九までは、先生の著書の愛讀者である。或は少くとも其の一二を必ず行李の底に納めてゐる人達ではないか。朝廷が國家に對する功績を嘉せられて、故人に贈位の沙

汰があつた時たとへ歸化したとはいへ、純然たる白人を之に加へさせられた事は、未だ曾てわが國の史上に類例なき聖代の慶事であつた。

瘦身矮軀

先生は如何にも風采の揚らない人であつた。瘦身矮軀、實に白人には珍しいほど小柄な人であつた。いつも前屈みに脊を圓くして、ひよこくと歩いて居られた。兩眼殆ど視力なく、左は盲目、右は眼球が大きく飛出して、それがまた強度の近眼であつた。時々、極めて稀に、衣囊から片眼鏡を出して、ちよつと右の眼に當てられる。その稀世の名文に寫された日本の文物、人情、社會等の精透なる觀察は、すべて此の弱い眼に片眼鏡を當てられる僅か十秒二十秒間の凝視の結果であつたのだ。大きな眼玉をぎよろつかせてゐながら心眼

觀破

の盲ひた凡俗には、とても見えない或物を、先生はかうして常に鋭くもまた敏く觀破せられたのであつた。

即興的

帝國大學の講師として、先生は年々歳々新しい題目で、新しい講義をせられた。固より準備にも相當に骨を折られた事であらうが、美しい、そしてよく整つた明快な講義の文章は、皆即座に、即興的に先生の口から出たものである。學生に書取らせるやうに、考へながらゆつくりと、併し少しの淀みもなく語られた。時々、即興の散文詩ともいひたい美しい文句や、奇抜な警句が、口を突いて出るのであつた。咳唾これ詩といへば古からう。錦心繡腸、これを織りなせる五彩絢爛の絲をほごして、繰れども繰れども縷々として盡きざる趣は、實に鮮であつた。銀鈴を振る如き其の聲は、また其の文の

散文詩

警句

咳唾これ詩

錦心繡腸

靈興

美しきが如くに美しく、抑揚高低にさへ何の不自然も無かつた。斷續しつゝ、一言又一言、皆能く聽者の胸底に詩の靈興を傳ふるに足るものがあつた。ふと目を舉げて先生を見る時などには、大抵窓外を眺めながら、講壇のあたりをあちこちと靜かに歩いて居られた。

天才といへば不規則な者の様に心得てゐる人もあらうが、勤勉努力の人であつた先生は、非常に几帳面で、鐘が鳴ると間もなく重さうな風呂敷包に、美しい装釘の詩集や文集を幾冊も入れたのを提げて、あたふたと教室にやつて來られる。講壇に上つて一揖し、ごく低い澄渡つた聲で、^(一)グッドモーニング、ゼントルメン。といひながら、風呂敷包を解かれるのが常であつた。書物のうち、本文として引用すべき箇處に

あたふたと
一揖す
(Good
morning
gentlemen.

は、各しるしの紙が挿んであつた。時間の終に近くなつて、其の日、講義すべき部分が終りかける事があつても、先生は必ず鐘の鳴るまで何かしら話された。

講義の間の休憩時間には、獨りで校庭をぶら／＼と逍遙して居られた。東京の大學には、あの地所がもと前田侯の舊邸であつた時代からの、古い／＼大きな池がある。幾百年の齡を重ねた鬱蒼たる喬木に取巻れて、淀んだ水は溷濁の色をなして、何時も黒かつた。池の彼方の小山の上には、俗に御殿と稱する集會所の古風な建物がある。先生が最も好まれたのは即ち此の池畔の逍遙で、例の前屈みに、其のあたりを歩みながら、なた豆の日本煙管や葉巻を燻らして居られるのが常であつた。近づいて教を乞ひたい事があつても、私達

幻想

は先生の静思を妨げる事を恐れて、滅多に側へは行かなかつた。落葉を踏みながら低徊して居られる其の姿を遠くから望んで、先生の脳裏を往來してゐる美しい幻想の、何物であるかを想像して見る事もあつた。

煙靄模糊

景色を見られても、先生には殆ど視力がなかつたから、常に煙靄模糊、さながら淡彩一抹の風景畫に對するやうに見えたのであらう。目には見ずして心に見られた其の印象は、遂に全き藝術的表現を得て、色彩ゆたかなる文字に寫されたのだ。鋭敏なる其の感性は、却つて此の極めて強い近視眼の爲に幸せられ、部分的なる細微の點を拂拭し去つて、一幅の全景を心裡に活躍する効果を収め得られたのである。

——小泉先生そのほか——

八 源九郎義經 其の一

辨慶の太刀取

(一)武藏坊辨慶。

辨慶^(一)思ひけるは、人の重寶は千そろへて持つとぞ聞く。奥州の秀衡は名馬千疋、鎧千領、松浦の大夫は、胡籙^{こさく}千腰、弓千張、かやうに重寶を描へて持つなり。いで夜に入りて京中に佇み、人の佩きたる太刀千振取つて我が重寶にせんと、夜な夜な人の太刀を奪ひ取りぬ。しばしこそありけれ、當時洛中に長一丈ばかりある天狗法師ありて、人の太刀を取る。とぞ申しける。

しばしこそありけれ

利生

かくて今年も暮れけるが、次の年の五月末六月の初までに、九百九十九腰こそ取つたりけれ。六月十七日五條の天神に参りて、今夜の御利生に、よからん太刀を與へてたび給へ。

夜と共に祈念す

と夜と共に祈念し、既に、夜も更けぬれば、天神の御前を出で、南へ向つて行く。人の家の築地の際に佇みて、天神へ参る人のなかに、あつばれよき太刀持ちたる人をぞ待ち居たる。

さ夜ふけて

曉方に近く堀河を下りに行くに、面白き笛の音こそ聞えけれ。辨慶之を聞きて、面白や、さ夜ふけて天神へ参る人の笛吹くは、法師やらん、男やらん。よからん太刀を待ちたらば取らんと思ひ、笛の音の近づくまゝに、さしく、みて見れば、未だ若き人の、白き直垂に胸板を白くしたる腹巻に、金作の太刀の心も及ばぬを佩かれたり。辨慶之を見て、あはれ太刀や、何ともあれ、取らんずるものと思ひて待ちぬ。

御曹司

御曹司其の時、木の下にけしからぬ法師の、太刀わきばさ

心も及ばぬ
何ともあれ

左右なく

みて立ちたるを見給ひて、彼奴はたゞ者ならず、此の比都に人の太刀を奪ひ取る者ならんと、少しもひるまずかゝり給ふ。辨慶現れ出でて、只今しづまりて敵を待つ所に、けしからぬ人の物の具して通り給ふこそ怪しく存じ候へ。左右なくえこそ通すまじけれ。さらば其の太刀こなたへ賜はりて通られ候へ。と申しければ、御曹司之を聞き給ひて、此の程さをこの者ありとは聞及びたり。左右なく得こそ取らすまじけれ。ほしくばよりて取れ。とぞ仰せられける。さて見参に参らんとて太刀を抜いて飛んでかゝる。御曹司も小太刀を抜いて、築地のもとに走り寄り給ふ。武藏坊之を見て、鬼神ともいへ、當時我を相手にすべき者こそ覺えねとて、もつて開いてちやうと打つ。御曹司、彼奴はけなげ者かなとて、電の如

をこの者
見参に参ら

けなげ者

くに弓手の脇へつと入り給へば、うち開く太刀にて、築地の腹に切先打立て、抜かんとしける隙に御曹司走り寄りて、左手の足を差出して、辨慶が胸をしたゝかに踏み給へば、持ちたる太刀をからりと捨てたるを取つて、えいやといふ聲のうち、九尺許ありける築地にゆらりと飛上り給ふ。辨慶胸いたく踏まれぬ。鬼神に太刀とられたる心地して、呆れてぞ立つたりける。

狼藉

御邊

御曹司、是より後にかゝる狼藉すな。太刀を取りて行かんと思へど、ほしさに取りたりと思はんずる程に、取らするぞ。とて、築地のおほひに押しあて、踏みゆがめてぞ投げかけ給ふ。辨慶太刀取つて押直し、御曹司の方をつらげに見やりて、念なく御邊はせられて候ものかな。常に此の邊におはす

る人と見るぞ。今宵こそ仕損ずとも、是より後に於ては心ゆるすまじき物を」と、呟きくぞ行きける。

九 源九郎義經 其の二

浮島原の對面

(一)左衛門佐源頼朝。
泣く聲を呑みて

佐殿は善惡に騒がぬ人にておはしけるが、此度は殊の外嬉しげにて、さらばこれへおはしました候へ。見參せん。と宣へば、彌太郎やがて參り、御曹司に此の由を申す。御曹司大きに悦び、急ぎ參り給ふ。佐殿つくづくと之を御覽じて、まづ涙に咽び給へば、御曹司も共に聲を呑みて泣き給ふ。

互に心のゆく程泣きて後、佐殿涙をおさへて、さても頭の殿に後れ奉りて、其の後御行方を承り候はず。幼少におはし

(一)平清盛の總母。
(二)蛭ヶ小島。

候時、見奉りしばかりなり。頼朝池(一)の尼の宥められしによりて、伊豆(二)の配所にて伊東、北條に守護せられ、心にまかせぬ身にて候ひし程に、奥州へ御下向の由はかすかに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと御忘れ候はで、取敢へず御上り候こと、申し盡し難く悦び入り候。これ御覽候へ、かゝる大事をこそ思ひ企て、候へ。八箇國の人々を始として候へども、皆他人なれば身の一大事を申し合する人もなし。平家の討手上せばやと思へども、身は一人なり。頼朝自身進み候へば、東國おぼつかなし。代官を上せんとすれば、心安き兄弟もなし。他人を上せんとすれば、平家と一つになりて、却つて東國をや攻めんと存ずる間、それもかなひ難かりしに、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿の蘇らせ給ひ

(一)源義家。

(二)源義光。

魚と水との如し

とかくの返事

大名小名

(三)山城國宇治郡の北部。京都と大津との間の如く

たるやうにこそ思ひ候へ。吾等が先祖八幡殿(一)の後三年の合戦に、舍弟刑部丞(二)と一つになりて、遂に奥州を従へ給ひける時の御心も、頼朝が只今の心にかでかまさるべき。今日より後は魚と水との如くにして、先祖の耻をすゝぎ、亡魂の憤を息めん。と宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司はとかくの返事もなくして、袂をぞしほられける。これを見て大名、小名互の御心推量りて、皆袖をぞ濡しける。

しばらくありて御曹司申されけるは、仰の如く、幼少の時御目にかゝりて候ひけるやらん、配所へ御下りの後は、義經も山科(三)に候ひしが、七歳の時鞍馬へ参りて、十六まで形の如く學問を仕り、さては京都に候ひしが、内々平家方便をつくるよし承り候間、奥州に下向仕りて、秀衡を頼み候ひつるが、

御旗揚の由承りて、取敢へず馳參る。今は君を見奉り候へば、故頭殿の御見參に入り候こゝちしてこそ候へ。身をば君に進らする上は、いかゞ仰に従ひ參らせでは候べき。」と申しもあへず、また涙を流し給ひけるこそ哀れなれ。さてこそ此の御曹司を大將軍にて上せ給ひけれ。

— 義經記 —

一〇 源頼朝論

新井白石

頼朝の行家(一)、義經を誅せんとする事甚だいはれなし。初め頼朝鎌倉に入りしより已に自家を經營するの志あり。されば東國の豪家を故なく誅滅し、又義廣(二)と戦ひ、義仲を討たんとせし類、悉く皆己に害あらん事を思へばなり。平氏の暴逆を誅せん由を稱すといへども、兵を擧げて四年が間一騎を

(一) 源行家。頼朝の叔父。

(二) 志田三郎義廣。頼朝の伯父。戰は養和元年閏二月のこと。

押領す

朝憲

して西せしめず、東國の郡郷を擅に押領して、己に功ある者に割き與ふ。いかで是を朝憲を重んずといふべき。義仲を討ちしも、彼已に京に入りて平氏を追落し、朝賞に與りしを惡めるが故なり。然るに義經その心を得ずして、院中に伺候して朝賞に與る。且その兵を用ふるの方天下に雙なかりしかば、最も頼朝に忌み思はれしなり。されば頼朝常に彼が兵權を奪ひて其の勢を孤にし、平氏滅びし後にこれを倒すにたやすからんことを謀れり。頼朝自ら朝に二心ある故に、朝に志ある者を忌めるなり。義經己が弟なりと雖も、當時既に朝臣に列して、京師の鎮護たり。然るにこれを輦轂の下に襲ひ殺さんとす。これ豈臣たるものゝしわざならんや。上皇の暗弱なるを利して、行家、義經が事を以てこれを脅し參らす

輦轂の下

に木曾と平氏とを滅すの功あるをもつてす。されど初めに平氏の兵威を摧きしは義仲の功なり。終に平氏を滅しよは、義經が功多しといひつべし。義仲を誅せし事は、法住寺殿を攻め參らせし罪を問ひしにはあらず。東軍の京に入りし時、たま／＼彼が凶惡の日にあひしなり。賴朝朝の御爲に彼を討ちしといふは詐れるなり。或は謂へらく、義經終に賴朝に叛きたり。さらば賴朝の彼を誅せんとせし事、理ともいふべしと。然にはあらず。義經初より賴朝に二心をし。たゞ賴朝の姦計あるを知らず、いにしへ賴光、賴親、賴信が如く、義家、義綱、義光が如く、兄弟共に朝の御守たるべしとのみ思ひて、賴朝の代官として義仲を討ち平氏を破りし後、京師を守護して院中に伺候せり。然るを賴朝不快の氣色ありしかば、いかに

もしてその心をとらんと思ひき。されば範賴平氏を破る事の叶はざるに及びて、義經讚岐に向ひし時、渡邊にて風荒く浪高きに眞先に船を出す。大藏、卿泰經これを諫めしに、義經「殊に存念あり、一陣において命をすてんと思ふ」といひき。その志もし此の度の軍に勝つことを得ずんば、最初に討死すべし。もし勝つことを得ば、賴朝が心も和ぎなんと思ひしにあらざらんや。かくまでに賴朝が爲に心を盡しぬれど、賴朝更によしと思ふ心もなく、平氏滅びし日、速に其の兵權を奪ひて召還す。此の後數通の起請文を以て二心をなき由を申ししかども、更にゆるさず。遂に討手を差向けたり。此の時義經自ら首刎ねて、その年比の志をあらはさんはいさ知らず、その餘は自ら死を救ふの謀を出さんにはしかじ。義經院宣を

兵權

起請文

申し請けしこと、已むことを得ざるに出でたり。其の志の如きは憐むべし。或人又いへらく、義經その志驕りて勇を恃み、みづから其の禍をとれり。且加ふるに景時が讒を以てすと。これ亦頼朝に黨するの説なり。範頼が愿にして怯なるも、つひに死を免れず。其の死せし時誰か彼を讒せし。思ふにたゞ頼朝が如きもの、弟たらん事、最も難しとこそいふべけれ。

— 讀史餘論 —

(一)大阪の人。本名覆並善八。油煙齋と號す。享保廿年(二二九九五)歿。

一一 狂歌

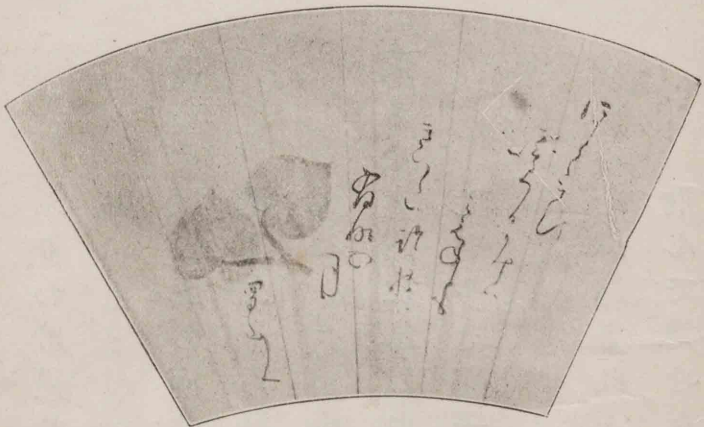
ふじの山夢に見るこそ果報なれ
路銀もいらす草臥もせず

(一) 鯛屋貞柳

(一) 幕臣。本名大田。南畝又蜀山人と號す。文政六年(二二四八三)歿。年七十五。

ほととぎす
鳴きつるか
けは見えね
どもきいた
證據は有明
の月
蜀山人

(二) 江戸の人。文
川雅望。本名石
元年(二二四九
十八)歿。年七



四方赤良筆蹟

歌よみは下手こそよけれ天地の
うごき出してはたまるものかは

(一) 四方赤良

さわらびが

握拳をふり上げて

山の横つら

はる風ぞ吹く

ほととぎす啼きつる

あとに呆れたる

後徳大寺の

ありあけのかほ

(二) 宿屋飯盛

(一) 江戸幕臣。本名山崎景貫。寛政十二年(一四六〇)歿。年六十三。

(二) 江戸の人。本名北川嘉兵衛。狂歌堂と號す。文政堂と號す。二年(一四八七)歿。年七十八。

(三) 江戸の人。田安家の士。田安小島源之助。享和二年(一四六二)歿。年六十。

(四) 江戸の儒者。本名立松東蒙。寛政元年(一四四九)歿。年六十四。

(五) 京都清水寺。

あまのはら月すむ秋をま二つに

朱樂菅江^(一)

ふりわけ見ればちやうど仲鷹

鹿津部眞顔^(二)

あらそはぬ風の柳の絲にこそ

唐衣橘洲^(三)

勘忍ぶくる縫ふべかりけれ

菜もなき膳にあはれは知られけり

しぎやき茄子の秋のゆふぐれ

平秩東作^(四)

ゆく春を思ひきれとや舞臺から

飛んで見せたる清水^(五)のはな

大屋裏住^(一)

うぐひすも蛙もおなじ歌なかま

經よむもあり歌よむもあり

つむり光^(二)

ほとゝぎす自由自在にきく里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

木端^(三)

世の中を何のへちまと思へども

ぶらりとしてはくらされもせず

一二 大日本國語辭典の序

十年一昔といふことを思ふと、上田^(四)松井^(五)の二君が國語辭

(四) 東京帝國大學教授文學博士。上田萬年。

(五) 東京高等師範學校教授文學博士。松井簡治。

(一) 江戸の人。本名久須美孫兵衛。文化七年(一四七〇)歿。年七十七。

(二) 江戸の人。本名岸宇右衛門。寛政八年(一四九六)歿。年七十。

(三) 江戸の狂歌師。

一昔
心祝

書の編纂に着手せられてからも、一昔はとくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晚餐會に招かれて打興じたのは、つい此の間のやうな氣もするが、其の頃始めて小學校に入つた余が娘は、已に人に嫁いで人の子の母となつてゐる。短いやうで長いものである。今や其の第一巻がいよいよ出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかもそれよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。

年の流

年の流は水の流と同じく、世事の變遷は行く雲のやうに窮が無い。此の一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、我が日本の國勢を一變せしめた。政治や軍事や工業や貿易の進歩發展の跡を見ても、其の間の十年は通常の十年

工程

では無かつた。二君の編纂事業はかういふ中に徐々と其の工程を進めて行つたのである。

Card.

(二) 東京市小石川
町區關口駒井

鑛山から掘出されて選分けられ、鑄分けられて行く鑛石のやうに、幾萬、幾十萬といふ古語や新語は、幾百部幾千部の典籍圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書留められ、整理せられる。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く。一月二月三月四月、秋も暮れ、春も逝いて、曆も幾度か改る。同じ仕事ははてし無く續く。傍から見れば、抄の行かぬことは齒痒いやうで、何時方のつくことかといふ程であつた。編輯室は松井君の邸内の離れ家にあるが、それでも夜半の半鐘に肝を冷して、餘所ながら無事を祈つた事も幾度か分らぬ。二君の筆と頭腦は間斷無く此の

緒に就く

間に活動して、取るものは取り、捨てるものは捨て、其の進捗は遅いが、其の成果は確實であつた。かくて粒々積上げた砂子も遂には山を成す喩のやうに、編纂の稍緒に就いた頃までには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は幾隻と無く進水式に浮び出たのであつた。

拮据

學者の仕事はぢみである。目ざましく世人を驚かすやうなことは無い。二君が拮据十餘年の編纂事業も、靜かな一室に靜かに行はれたのである。けれども一たび其の室に入つて山成す材料を見上げるものは、何人も其の難事業たることを承認せずには居られぬ。又編纂者の決心と根氣を尊敬せずには居られぬ。さうしてそれが決して學者の閑事業では無くして實は國家的大事業であつた事に考へ到らなけ

閑事業

緊急

ればならぬ。國民精神の基礎、隨つて國民教育の根柢となる國語の調査整理が、現今に緊急であることはいふまでも無い。國家は軍備ばかり進んでも一等國とはいはれぬ。あらゆる方面の發展は教育の力に依らねばならず、教育の進歩も國語の普及が根本である。狭い編纂室に行はれて、何等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が、實は絶大な國家的事業であつたといふことに於て、學者の生命があり、學術の意義があるのである。十年以前に比べて鐵道の哩數や、軍艦の噸數の大いに増加したのを祝する人は、之と同時に、數隻の巡洋艦で満足して居つた我が國語界が、十餘年後の今日、一大戰艦にも譬ふべき本書を有するに至つたことを驚歎し、歎美しなければならぬ。文物の整備するのは國家の誇であ

り、飾である。又精神界を支配する大きな武器である。完全な一辭書の存在することも、國民に取りての立派な強みになる。此の一大産物が堅忍不拔な二君の手に依つて成就せられたことは、友人たる余の言ひしらぬ喜悅を感じる所以である。此の十年は國語界に於ても、亦無意味な十年では無かつたのである。

沒交渉

學者の事業はいつも世間と沒交渉のものではない。専心な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於ては、進歩して行く世間を一日も餘所に見て行くわけには行かぬ。十年一昔の間には、國語其のものの中にも絶えず變遷が行はれてゐる。それに注意するだけでも容易な事では無い。靜寂な編輯局は、紛糾

紛糾

した實社會と常に相往來して居るのである。

幾多の困難に打克つて、國民の覺知せぬ間に、其の背後に大きな國家事業を建設せられた二君の勞苦は、今更述べるには及ばぬ。思ふに後世の人は、必ず之を明治時代に企てられて大正時代に完成した大事業の一つに數へるであらう。余は二君の満足と喜悅を察知すると同時に、今か今かと十餘年を待暮らした同友と共に、まづ二君の成業を祝して、一大白を浮べようと思ふのである。

大白

一三 仁和寺の法師

吉田 兼好

一 石清水

仁和寺(一)にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、

(一)京都市の西郊花園村にあり。宇多法皇の創建。俗に御室といふ。

かちより詣(一)
づ(二)共に石清水
の麓にある末
寺末社。
かばかり

心憂くおぼえて、或時思ひたちて、唯一人かちより詣でけり。極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて傍の人に逢ひて、年ごろ思ひつる事果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りたる人毎に山へ登りしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へまゐるこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。とぞいひける。すこしの事にも先達はあらまじきことなり。

二 鼎

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、おのゝ遊ぶことありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔を差入れて舞出でたるに、満座興に入る

かづく

くいもる

こと限りなし。しばし奏でて後抜かんとするに、大かた抜かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち割らんとすれど、たやすく割れず、響きて堪へ難かりければ、叶はすべき様なくて、三足なる角の上へ帷子を打掛けて、手をひき杖をつかせて、京なる醫師のがり率て行きけるに、道すがら人の怪しみ見ること限りなし。醫師の許に差入りて、向ひ居たりけんありさま、さこそ異様なりけめ。物をいふにも、くゞもり聲に響きて聞えず。かゝる事は書にも見えず、傳へたる教もなしといへば、また仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など、枕上に寄り居て泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝる程に、或者のいふやう

は、たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらん。力をたて、引き給へ。とて、藁の蒂をまはりに差入れて、かねを隔て、首もちぎるゝばかり引きたるに、耳鼻かきうげながら抜けにけり。からき命まうけて、久しく病み居たりけり。

三 木のぼり

高名 高名の木のぼりといひし男、人をおきて、高き木にのぼせて梢をきらせしに、いと危く見えしほどはいふこともなくて、おるゝ時に、軒だけばかりになりて、あやまちすな。心しておりよ。と言葉をかけ侍りしを、かばかりになりては、飛下るゝともおりなん。如何にかくいふぞ。と申し侍りければ、その事に候。目くるめき枝危きほどは、おのれがおそれ侍れば

高名

くるめく

下藤

申さず。あやまちは安き所になりて、必ず仕ることに候。といふ。あやしき下藤なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠もかたき所を蹴出して後、やすく思へば必ずおつと侍るやらん。

四 佛

八つになりし年、父に問ひていはく、佛はいかなるものにか候らん。といふ。父が曰く、佛には人のなりたるなり。と。又問ふ、人は何として佛にはなり候やらん。と。父また、佛の教によりてなるなり。と答ふ。また問ふ、教へ候ひける佛をば、何が教へ候ひける。と。また答ふ、それもまたさきの佛の教によりてなり給ふなり。と。また問ふ、その教へはじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひける。といふ時、父、空よりやふりけ

ん、土よりやわきけん。」といひて笑ふ、問ひつめられてえ答へずなり侍りつ。」と諸人に語りて興じき。 — 徒然草 —

一四 夏のさまぐ

姉崎 正治

夏といへば一番暑い時、冬といへば一番寒い時、これはいふまでも無い事であるが、然し今までに随分暑い冬を過したこともあり、涼しい夏を暮したこともある。一番涼しかつたのは蘇格蘭(一)の夏で、日本ならば秋の涼風の立つ頃、日中暫くは外套を脱いでも、朝夕は重着もしなければならぬ程であつた。しかしそれでも夏は夏で、朝早く起出でて、五時頃には已に日が高く、夕暮には九時過でもなほ明るい。朝の日光が青々とした野山を照し、野に咲く桔梗や露草に露の滴つ

Scotland.

たさまは、やはり夏の朝の爽かさである。夕暮に薄明がいつまでも残り、山々も湖面も灰色になつて、天地が一幅の墨繪になつても、空には夕焼の黄金色が満ちて、夜の來る歩みはおそい。食後縁側などいつまでも語り續けては、やはり夏の夕の樂しさがあつた。

Helmet.

其の反對に暑い冬を印度で過したが、朝から外出するには、大きなヘルメット(一)を被り、青眼鏡をかけなければ、眼がきらする。日中には長く歩行するのは危険な位である。野山は水氣の無い爲に枯果て、木枯の吹いたあとのやうではあつても、時候は夏の温度である。それ故日が西に入つてや、涼風の立つ頃、馬車を驅つて菩提樹や榕樹の並木の下を行けば、僅かに車の駈けるだけの風が面を打つ。それでも

Ceylon.

天地は青々と霞んで、夕焼のほてりも漸く去り、東の空に月が静かに出ては、涼しい月の雫を浴びるにも似て、日本の夏の夕に劣らない清爽の感があつた。

錫蘭島に行けば、印度本國とは違つて、年中樹は緑で鬱陶しい程茂り、四時花が咲いて盛夏の如くである。朝早く車を驅つて森の間、湖水の邊を行くと、鰐が道に横たはる。孔雀が驚いて飛出す。猿は木の上に遊び躍る。大きな蜥蜴は足音を聞いて水に逃込む。熱帯の動物界は朝早くにのみ見られる。午後になれば、大抵毎日夕立が来て強く雷が鳴り、其の霽れた後には、夕方が蒸暑く呼吸も苦しい程であるが、到る處螢が群れて飛ぶので心が慰まれる。

印度洋には冬と夏との區別があつて、冬は東北の風が吹

五體

Sirocco.

續き、海は蒼く氣は爽かであるが、夏になつては、西南の風に空も海も黄ばんで濁り、吹く風は湯氣を浴びたやうに蒸暑い。其の中間に靜穩な時もあるが、此の靜穩の暑さは却つて苦しく、見渡す限り海は油を流したよりも靜かに、そよ吹く風も無い。時々午後には龍卷の上る時などは、一時風は吹いても、あとは靜かで、五體は空や海と共に油の如く融けたかと思ふくらゐだるい。暑いといへば暑い、忍耐の力は或程度までこれに克ち得るのである。

いろ／＼の國にさまざまの趣はあるが、苦しいのは日本の濕氣の多い夏。伊太利で沙漠から來る砂を交ぜた熱風のシロツコの吹く時。快いのは一體に北歐の夏、緑は滴るが如く、柔い草の上に寝ころんで讀書をしても、蛇の憂も無けれ

ば、蚊にも刺されない。さうして婦人や子供は白い着物を着て、蝶々のやうに緑蔭を飛んで歩いてゐるのである。

— 停雲集 —

一五 大鳴門の眺

久保天隨

(一)淡路國の西端。
(二)阿波國瀬戸村の大字。
(三)鳴門海峡。

そも鳴門といふに二箇所あり。鳴門岬(一)に近きは、大鳴門にして、小鳴門と呼ぶは、なほ北に數里を隔て、北泊(二)のあたりなりといふ。さてこの海峡(三)には、中程と覺しき所に、廣さ數百歩なる平岩あり。中の瀬と名づく。これと並びて巨礁數を知らず。かく瀬の巖に續ける處は水底さまでならねど、其の左右は俄に深くなりゆき、奈落の底に通ふかと疑はれて、百仞にも餘れりとぞ。折しも銀潮滿ち湛ふれば、巖どもは沈み

奈落の底

(一)讃岐國大串崎の北方海中。

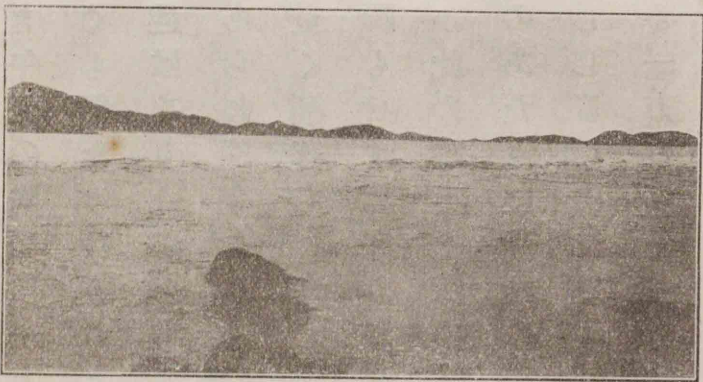
ねちく

末廣に開く

それかあらぬか

渺漫

ほのめく



大鳴門

て見えわかず。遙かに讃岐の山々、小豆島などの霞みて見渡さるゝのみ。瀬より少し南に離れて、飛島とて殊に大いなる巖あり。形寶珠の如く、上には松などねちけて生ひたり。こなたの海は扇に似て末廣に開き、阿波の椿の泊、紀伊の日の御崎など、それかあらぬかと、ほのかに認められ、碧波渺漫として果も無く、目に遮るものどては、ほのめく白帆の影のみ。近きあたりには、海士の小舟を漕出でて、藻かり、魚釣などするもの多く、此處の波間には水を潜りてあさる鶉の鳥あらは

山輝水映
午天の陽光
景趣

れ、彼處の岩根には翼休むる鷗あり。山輝水映の景色は、雲無
き午天の陽光に一入の匂を添へて、打見る限り、繪にいとよ
くも似たりけり。もとより形勝の聞えある此の地の、かく景
趣はありながら、唯これのみにては殊に壯觀といふべくも
あらねば、今や人々の久しく語り聞えし言の葉も疑はれて、
「早く潮落ちよかし。渦巻くさまはいかならん。」など呟きつゝ、
瞬もせず打守りてぞありし。

此の時早く

此の時早く、海山いづくともなく鳴る音して、中の瀬の巖
のあたりに、潮頭の崩るゝが見え初めぬ。これぞ退潮の始り
ししるしにて、外洋は早く引けども、内海は遅ければ、見る見
る一方は高く、一方は低くなりもてゆきて、瀬戸海の水を傾
けてぞ此の門に集り來るなる。其の疾きことは矢の如く、勢

なだれ落つ

彈指の間

水準

網代木

鼎の沸くが
如し

驚瀾駭浪

狂奔馳逐す

の凄じさは磐石の轉倒にも譬ふべきばかりにて、鎧岩をあ
らひ、戸崎を衝き、更に横に折れて、かくは中の瀬よりなだれ
落つるなりけり。此の轉變は彈指の間に起りぬれば、拙き我
が筆の力に及ばず。なほ打見であるに、水準の差は六七尺に
もなりて、海峽十餘町の間は全く瀧のさまを現じ、譬へば、早
川の水の網代木にせかれてたぎるに異ならず。瀬の巖の下
なる深淵には、一たび落ちたる潮の、また底よりくらくと
煮え返りて、さながら鼎の沸くが如く、忽ちにして盤渦を生
ず。其の大きさ徑三間許と覺え、勢は緩やかなれど、さすがに
怖ろしげなり。瀧の落つる事烈しければ、驚瀾駭浪争ひ騒ぎ、
盤渦の中に入るものは跡なくなりゆけど、外にあるものは
狂奔馳逐して、後浪と前浪と相及び相闘ひて潮頭を碎き、寄

轉拗す

輾落す

震轟す
地軸

颯々の響
跌宕

(一)支那直隸省順
德府平鄉縣。
紀元四百五十
六年項羽大十
に秦の軍を此
に破る。

せては返し、行きては走り、輪旋すること百回にしてやまず、
遂に中心の凹みとなりて、又渦を作る。こは小さけれども卷
くこと甚だ急にして、其の邊には必ず逆廻せるものを作り
て、ひたすら轉拗するに似たり。かくて大渦、小渦の沸涌する
もの數を知らず。はては互に揉合ひ、且現れ、且ふたがる。潮の
愈、退くに隨ひ、瀨なる巖の尖頂愈、露れ來れば、亂濤山の如く
襲ひ進み、打越えて輾落し、今は海底鳴動して、千輛の雷車一
時に震轟するが如く、地軸も打拉うちひきちぎがれん許なり。碎けては散
る波の花、萬顆の泡珠は長空に晴雪を飛ばし、天風潮氣を捲
けば、巖上の松の梢に颯々の響あり、誠に瀬戸海の潮の息、唯
半里の喉元にせまりて喘ぐなれば、かくなれるも理といふ
べく、見る様の壯快にして跌宕なるは、鉅鹿の戰に殷聲呼ん

(一)支那河南省南
陽府葉縣の
南。紀元六百
三十八年漢の
劉秀、王莽を
此に破る。
蛟龍も聳駭
すべく、鯨鯢
も奔蹙すべ
し。

睨視す

神驚き心死す

卓犖
胸宇を衝く
豪懷

で地を撼かし、昆陽の役に百萬の兵を一撃に鏖にしたるに
比ぶべくもや。蛟龍も聳駭すべく、鯨鯢も奔蹙すべしとこそ
覺ゆれ。まのあたり見る身は慄然として震ひつ、毛髮逆さま
に豎ちて、そゞろ寒き程なり。ありし小舟のいくつは、遙かに
福良の方に退き、鷗などもいづ方へか隠れぬ。折しも俊鶻一
羽中空を輪に舞ひて、行者が鼻なる高巖の頂に下り、翰を収
めて睨視するがありけり。

時の遷りゆくまゝに、奔潮は益、怒りて、射注の勢終に止む
べくもあらず。下りて飛鳥を衝き、餘流滔々として南に下り、
海中明らかに一條の急川を馳せしむ。我等初の程は神驚き
心死して、面に血の色なきまでなりけるに、漸くに自ら蘇し、
濶大卓犖の感の胸宇を衝くに方りては、豪懷物の譬ふべき

掀簸

飛箭弦を離る
(一)淡路三原郡灘村の海上。

天風に嘯く

にあらず。舟子に命じて試に我が船を渦の中に入れしむ。一葉軽くして水天と抗し、掀簸上下してめぐるさま、獨樂に等し。かの大渦に入るれば、一分時ならずして一旋し終り、小渦に於ても五分を出でず。渦の轉拗するにつれて、急川の裏に吐出され、流に乗りて下らんとすれば、急につと漕返し、また渦に入る。かくすること幾度なるかを知らず。其の間舷を叩きて天風に嘯き、身はすでに仙化せる思あり。舟子は楫をとどめて、今はこれ初秋の頃にして、觀潮には好き時なれども、三月の大潮には瀧の高さ二間に近く、心も言葉も及ばぬばかりなり。われ等はよく險に慣れたれば、かゝる折を待ちてわざと舟を下す。そが潮にひかれて走るさまは、飛箭の弦を離れたるが如く、四里の海路も半時ならずして流れ下り、沼

魂魄波に漂ひ恍惚無有の境にさまよふ

今はさて

をさく

島のあたりに着くべし。などいふ。かくいふ中にも潮の勢いやまして、いつやむべしともおもほえず。豪懷今は極りて、悽愴の感を惹き、魂魄波に漂ひ、恍惚無有の境にさまよひて、夢とも現とも分かさりけり。

さる程に日も稍西に傾きて、五時頃とも覺しき程になりければ、今はとて舟を南に移しぬ。此の時までありしかの俊鶺は俄にたちて、二度三度こなたを顧つゝ、南に飛びて、いつしか暮雲の中に跡を隠しつ。船は急川の裏に入りぬれば、一瞬千里の勢にて、富士川の川船にもをさく、劣らずや、時を移して、辛くも流の外に截出でて帆を揚ぐるに、こゝは海面鏡の如くにて、追風さへそひければ、半時ばかりにして、撫養の浦近くなりぬ。かなたこなた蒲帆斜に夕陽を孕みて、漁

欸乃

(一)淡路津名郡。 黯然

歌欸乃の相答ふるも聞え、沼島のあたりには、紅霞一片たな
びき渡りて、鳴門の海峡には、輕霧既にたち、單めたり。淡路島
山もはや暮れかゝり、先山(せんざん)の翠は黯然として、別を惜しむの
色をなし、昨日杖を曳きたるあたりの忍ばるゝこそ、いとを
かしかりけれ。

—時文軌範—

一六 長江湖航

徳富猪一郎

予は今朝長沙(二)を去りて、漢口(三)に歸航する湖南汽船會社所
有船湘江丸の客船中にあり、船は既に湘江(四)を出でて洞庭湖
に入り、風あり、波あり、時に雨あり、冷氣秋の如し。乃ち小閑
を得て、長江湖航(六)を略報致すべく候。

七月九日夜九時(七)、上海に於て大阪商船の大吉丸に乗込み

(一)支那湖南省の首府。開港場。
(二)支那湖北省漢陽府に屬す。
(三)支那廣西省の東北隅に發し長沙を経て洞庭湖に入る。
(四)支那本部第一の大湖。
(五)揚子江のこの長流。
(六)世界第四の揚子江の河口。東洋第一の貿易港。

極目際なし

一霎

指願の間に在り

候。九日の夜といはんか、十日の曉といはんか、我が大吉丸は
既に長江の本流に入れり。江といはんか、海といはんか、極目
際なし、唯茫々として、月影の江心に涌くあるのみ。快眠一霎
後、甲板に出づれば、兩岸の風色、我が精銳なる雙眼鏡の力を
借りて、始めて仔細を辨ずべし。叢生したる蘆葦は、定めて北
支の高梁と其の長を競ふべく、柳蔭の民舎は、概ね蘆葦を以
て葺けるが如し。水邊に眠る水牛、水草の裏に魚を撈る漁夫、
河童の如く堤外の小流に出没する兒童、而して往來織るが
如き小帆、大帆、悉く指願の間に在り。然も長江の大には何と
いふとも、平身低頭せざるを得ず候。此の邊は四十清里の河
幅に候由、其の大きさ加減御察しこれあるべく候。即今揚子
江は増水すること四十尺以上と聞及び候。正にこれ長江最

大膨脹の季節に候。

船中無事、唯長江圖説によりて其の地理を察し、其の雄偉
壯大なる光景に應接すると、然らざれば籐椅子によりて江
上の涼風を滿面に受けつゝ、晝寢を貪るあるのみに候。

渺々^{タム}奔波與岸平^{カナリ}

半江雷雨半江晴

布帆多在柳梢上^ニ

掠水沙禽不識名^ヲ

(一) 露おかぬ方
もありけり夕
立の空より夕
廣き武蔵野の
原

これは全くの實景に候。一字の虚構なし。夕立の空より廣き
武蔵野の原。と太田道灌が詠じたる歌も、今更思ひ出され申
候。唯與岸平^{カナリ}と申せども、時としては岸上に溢れ申候。漢口平
水五十尺と申せば、今日にては九十尺なり。一萬五千噸の戰
鬪艦の六百哩の上流に溯るも、決して不思議にこれ無く候。
十一日は長江の雨景を眺め候。南京即ち金陵に着したる

(一) 王安石、宋の
政治家、文學
者。(西曆一〇
二一—一〇八
六)

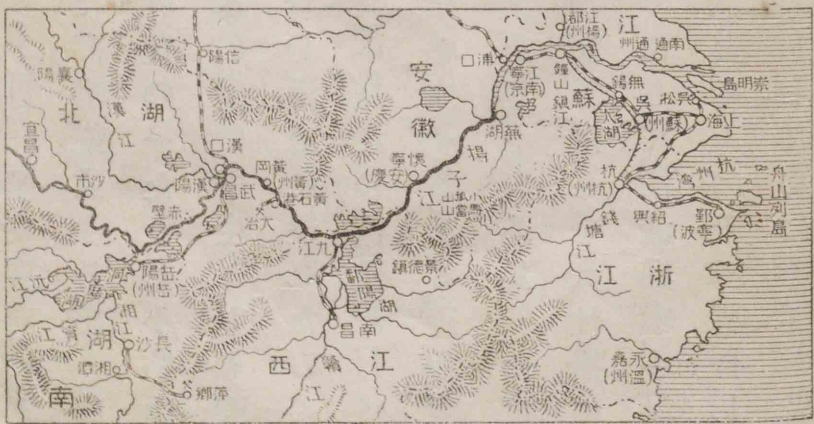
江雲模糊

(二) 安徽省にある
條約港。

(三) 元代の有名な
小説。

肯綮に中る

頃は江雨霏々たり。王荊公の夢寐
忘るゝ能はざりし鐘山も、江雲模
糊の裏に半ば封ぜられ候。蕪湖^(一)に
至れば大雨盆を傾くるが如し。所
在なければ、船中備附の水滸傳を^(三)
讀みて閑を消し候。而して今更の
如く、水滸傳が支那人の思想及び
生活を叙するに於て要領を得、肯
綮に中りたるを感歎致候。即ち風
景を記するに於ても、實際に近し
といはんよりも、實際其の儘と存
候。



(一)安徽省の首府。

十二日は長江航行中最も獲物多き日に候。安慶府に抵れば、江畔に高塔聳立するあり。唐宋

詩人の好題の一たりし小姑山は、

縱令増水の爲に平生よりも深く

小 其の腰骨を洪濤に没したるも、な

ほ滾々たる長江の柢柱として、其

姑 の中心に屹立するあり。陸龜蒙が

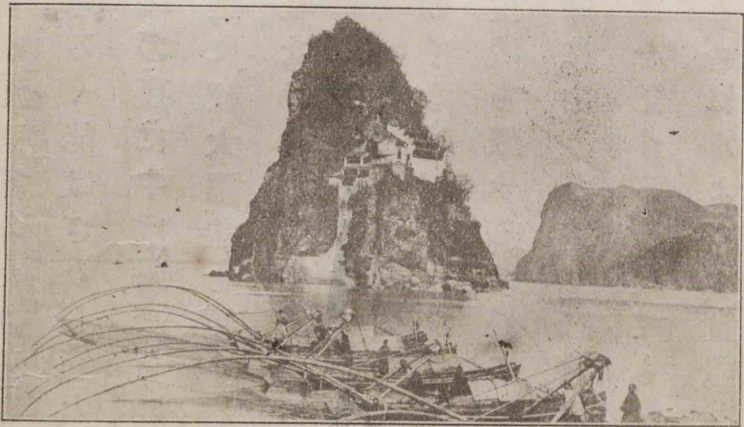
天下の險と稱したる馬當山は、球

山 磨川の所謂鎗流しを大仕掛にし

たるものにして、江流廻環、小渦、大

渦、大大渦其の下に千轉萬合しつ

つある、人をして爲に毛髮を豎て



(二)唐の文人。
(三)肥後國八代郡の山中に發し、八代港に注ぐ。

毛髮を豎てしむ

しめ候。

十三日は大冶の鐵山を遙見し、薄暮漢口に着し候。漢口は

武昌府と江を隔て、相對し、恰も馬關と門司との如し。更に

漢水の來會する頭に漢陽あり、鼎立の姿をなし、洵に南支の

雄鎮に候。着船と同時に湖南汽船會社の木幡氏來船し、同夜

直ちに同社の湘南丸が長沙に向けて發航するにつき同行

せずやとの誘引あり、一議に及ばず、渡りに舟の心地にて、直

ちに乗移り申候。

十四日、目覺むれば身は湘南丸の上において、漢口上流の

揚子江を溯りつゝあり。此の邊、江口より六百餘哩の上流を

れども、江の幅はなほ一哩以上或は二哩にも及ぶべく、江水

は依然淼茫たり。江岸には隨處に水牛群をなし、兒童の水牛

(一)湖北省武昌の縣。東南に在る一府。
(二)湖北省の首府。
(三)湖北省にあり。

鼎立 雄鎮

一議に及ばず、渡りに舟

宛然

を驅使するや、狗兒を扱ふよりも容易なるが如し。耕作には固より之を使用致居候。其の江畔の柳蔭に兒童が牛背に腰を掛けて悠然たる様は、宛然一幅の畫に候。而して増水の痕跡は隨處にあり。根こぎの柳樹など到る處に倒れ居候。

十五日、起きて江水を見れば既に碧なり。乃ち船の洞庭湖に入りたるを知る。九日以來赤味噌汁の如き江水の中に生活したる此の身に取りては、如何にあり難かりしよ。直ちに洞庭湖水の水風呂に浴し、心身爽快に相成申候。

碧愈、碧

湘江に入れば碧愈、碧、江流も漸く縮りて、始めて河らしく感じ候。

申すまでもなく、洞庭湖の見物は、大筏に候。一箇の筏の上には十數軒の家あり、豚も飼へば鶏も養ふ。時としては野菜

畑さへこれ有り、遠く望めば一村落の如し。然り一村落が筏となりて洞庭を過ぎ、漢口を経て蕪湖に達し、此處にて豚、鶏等悉皆賣捌く由に候。

—七十八日遊記—

一七 元 寇 其の一

三 宅 雪 嶺

(一)北條第六代の
執權。弘安七
年(一九四四)
歿。年三十四。

日露戦役の酬なりし時、朝廷は北條時宗に從一位を追贈せさせ給ひぬ。

呑噬

惟ふに元は國を滅すこと四十有餘、能く其の呑噬を免れたるものあらざりき。しかも我一たび之と干戈を交ふるや、之を撃破してまた近海に出没すること能はざらしめぬ。元、使者を遣はして好を通ずるを求め、時宗斷乎として之を拒めり。かくて戦端はこゝに開かれたり。此に就きて自ら三箇

好を通ず

戦端開かる

國是

(一)龜山天皇の御代。弘安四年を去る十三年前。

(二)後宇多天皇の御代。

の疑問の出づるあり。其の一、拒絶は果して時宗の意志に出でしか。其の二、拒絶は果して道理を具へしか。其の三、拒絶は果して得策なりしか。事の跡に就きて稽ふるに、拒絶は時宗一人の志よりせしにあらず。當時彼を輔佐せし多くの人の與り關せし所にして、寧ろ國是の然らしめし所と謂ふべきのみ。初め元の我に使者を遣はしたるは、實に文永五年にてありき。時宗年甫めて十八、余は其の拒絶の獨斷ならざりしを信ず。爾後元使の相踵いで到るもの數次、十三年を経て弘安四年に至り、終に大舉して入寇す。時に時宗意氣正に旺盛、恐らくは斷乎たる決心を以て事に臨みしならん。故に一戰して元兵を鑿にしたる、時宗與りて功ありとす。唯十三年間同一の方針なりしは、國論の之を致し、ものとなすべし。

恩威並び具

(一)今の朝鮮のこと。

不遜

元の好を通せん事を求め、而して我の之を拒絶せしは稍穩ならざるに似たれども、彼の國書を閱するに、實に我に於て拒絶するの已むべからざりしを知るべし。其の書や文辭堂々恩威並び具る。彼必ず以て我を心服せしむるに足ると爲し、ならんも、顧て我が日本の歴史より察すれば、全然拒絶するの外、他に採るべき策あらず。其の間を通じ好を結び、以て相親睦せん、といへる、辭として難すべきものなけれど、我を待つに屬國を以てし、高麗と同一視する態あるは、其の語に明らかなり。彼自ら何の異とする所あらざるべしと雖も、我に在りては古來未だ彼の如き不遜の國書に接したることあらず。怒らざらんと欲するも、豈能く得んや。當時彼の國書を覽し者、一として書辭の不遜なるを咎め且憤らざる

相懸隔す

躊躇す
理非明白

梟す

滅滅
危殆に瀕す

は無かりしならん。國土面積の廣狹相懸隔するの著しきを
思ひて、國力を誤信せし者は、成るべく圓滑に局を結ばしめ
んとして開戦に躊躇したらんも、理非は既に明白なりしな
り。元主使者を派して我を促し、我之を斬りて首を梟せしか
ば、其の怒りて兵を發し入寇せしもの、彼に在りては已むを
得ざりし所ならん。則ち已むを得ざりし所ならんと雖も、其
の此に出でたるは、もと我が國情に通ぜざりしが爲のみ。若
し能く我が國情に通ぜしならんには、決して此に出でざり
しなるべし。彼既に戦を開くに決し、十餘萬の大軍を發して
入寇す。一夜颶風俄に起り、兵船多く覆没す。我が兵之に乗じ
て襲撃し、殆ど之を殲滅せり。乃ち言ふ者あり、當時若し颶風
起らざりしならば、我が國運或は危殆に瀕したりしならん。

必勝の算

と。言者の説にして當れりとせば、即ちかの開戦に決せしは、
策の宜しきを得ざりしものと謂ふべけれど、而も其の言ふ
所や實に謬れるの甚だしきものにして、我が開戦に決せし
は必勝の算ありて然りしなり。假に颶風起らずして、彼の陸
兵皆上陸したりとせば、彼我の勝劣則ち如何。元史に據れば、
彼の兵數二十萬と號す。數に於て少からざれど、かばかりの
軍隊を以て能く日本征服の功を擧げ得べきか。

一八 元 寇 其の二

元の時代は支那古今を通じて造船術の最も發達せし時
といはれ、我に寇せし兵船は閣龍カロンの亞米利加發見に用ひし
ものより、尙堅固なりきと傳へらるれど、其の颶風に遭ひて

Columbus.

兵站

糧を敵に因

手を拱く

給養

(一)承久三年後鳥羽上皇の北條氏を滅さんとせられたし時の戦亂

多く破壊せしに觀るも、以て略構造の如何を察するに足らずや。彼累りに諸邦を征服せしも、かく多數の兵船を運用せしことは曾てこれ無し。また彼が操船に巧なりしかも疑なきを得ず、既に十萬、二十萬の軍隊を送遣せし後、猶絶えず兵站の連繼を過たざること、果して其の能くするを得る所なるか。糧を敵に因るの心算なりきとするも、全軍を支ふるに足るべき食料を徵發するは、頗る困難の業ならずや。若し我に於て、手を拱きて彼の欲するがまゝに従ひしならば、或は徵發に依りて全軍を給養し得たるべきも、これ到底望みて得べからざる所ならずや。

啻に軍隊給養の難きのへにあらず、彼我交戦の結果、彼また勝つべからざる運命ありしなり。(一)承久の亂、北條氏の兵畿

擊摧す

武を練る

鬱勃たる士氣

(一)Marco Polo, 伊太利の旅行家。中央亞細亞、印度等處に支那の世に二十餘年に仕へて、その間に祖

内を指して西上せし者十九萬人、若し此に關西の兵を合せば、數に於て優に元兵の上に出づるを得しや必せり。加ふるに我は地理に精しく、便利を占むる事亦多し。十萬、二十萬の元兵を擊摧するに於て何か有るべき。戰亂を見ざること五十餘年に亘りしと雖も、國を擧げて武門の治を享け、未だ嘗て一日も武を練るを怠らず。爾後久しきを經ずして、天下麻の如く亂れ、數百年間唯戰爭をこれ事とせしもの、決して偶然なりとせず。當時此の鬱勃たる士氣を以て元兵に對す、之を殲滅するは寧ろ易々たりしなり。且(一)マルコ・ポーロの記す所に據れば、元兵の大敗せしは、其の兩將の不和に基づける如し。我が軍の士氣旺盛なるを以てして、彼が主將の不和なるに加ふる、單にこれのみを以てするも、勝敗の數既に明ら

謬想

かなりとすべし。如何なる點より察するも、我彼を殲滅するの理ありて、彼我を征服するの虞なし。我の斷々として拒絶せる、決して無謀の舉にあらず。神風の加護に頼りて幸に勝ちたりと思惟するが如きは、謬想到過ぎず。

目睹す

龜山上皇の御身を以て國難に代らんと祈らせ給ひしはいとも畏し。既に上皇の御身を以て國難に代らんとし給ふを目睹す。國內の民誰か奮つて國に殉ぜんとせざらん。之が爲に上下舉りて、國難に當らんと決心を固めたるや疑ふべくもあらず。元兵にして上陸し、隊を整へて東進し來りしとせんか、乃ち我が兵の如何に勇を鼓して邀撃せしかは知るべきなり。其の海上に於けると同じく、之を陸上に鑿殺したるや必するに難からず。颶風の起りしは幸といふよりも、

邀撃

醞釀す

較著

寧ろ不幸といふべし。元兵にして上陸したらんには、我初め多少の苦戦あらんも、終に全勝を制し、更に勢に乗じて高麗を畧し、かくて漸く醞釀せる國內の紛争を移して、外地の經畧を事としたりしなるべく、爲に我が日本の獨り較著なる發達を遂げしのみならず、東洋全體亦大いに進歩の見るべきものありしならん。颶風起りて戦はずして勝ちしより、竟に武を海外に用ひず、徒に國內の紛争に忙殺せらるゝに至りしは、洵に遺憾の極といふべし。

元は一敗して後更に再舉を圖らんとせしが、諫むる者ありて、事遂に止めり、智とすべきなり。此の一役に於てだに海岸到る處造船の音喧しく、爲に費し、所莫大の額なりきと傳ふ。故を以て、若し一敗に懲りずして再舉を圖り、一層の準

底を傾く

備を整へて我が國に來寇せしならば、國力の底を傾くるに至りしは疑ふべからず。何ぞ八十年後に分割せらるゝを待たんや。

—小泡十種—

殉難

一九 殉難志士の詩歌

故郷へ送る文の中に

吉田松陰

親おもふ心にまさるおやごゝろ

けふのおとづれなにと聞くらん

留魂録を書きをはりて

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも

とゞめおかまし大和だましひ

辭世

僧

月照

(一)幕末の勤王家。京都清水寺成就院の住職。安政五年(一八五八)薩摩に投じて死す。年四十六。

(二)幕末の勤王家。雲演と號す。若狭小濱の人。安政五年捕へられ、四年殺さる。年四十四。

妻臥病牀兒叫飢挺身直欲當戎夷今朝死別與生別唯有皇天后土知

雲演

(三)京都の儒者、勤王家。山陽の第三子。安政五年捕へられ、五年斬らる。年三十五。

大君のためには何かをしからん

さつまの瀬戸に身は沈むとも

辭世

梅田源治郎

あはれ病に臥し
妻は叫びて
我が身を直
に當りて
死す朝
死別與生
別唯有皇
天后土知

蹟筆 源治郎田梅

述懷

君が代をおもふ心の一寸ち

わが身ありとも思はざりけり

頼三樹三郎

我がつみは君が代思ふ真心の
ふかゝらざりししるしなりけり

辭世

賴三樹三郎

妖嬈

排雲手欲拂妖嬈

失脚墮來江戸城

井底痴蛙

井底痴蛙過憂患

天邊大月缺光明

身從湯鑊

身從湯鑊家無信

夢渡鯨濤劍有聲

風雨多年苔石面

風雨多年苔石面

誰題日本古狂生

辭世

豐原邦之助

かぞいろ

かぞいろの育てし身をも君がため

捨つるも世々の恵とおもへば

眞木保臣

後れなば色もさくらに劣るらん

(一)幕末の勤王家。和泉と稱す。筑後水田天神ノ神官。二元治元年(一八四五)に義兵を擧げて敗死す。年五十三。

(一)幕末の勤王家。福井藩士。景岳と號す。安政五年捕へられ。翌年斬らる。年二十六。

獄中作

橋本左内

二十六年夢裡過

顧懷平昔感滋多

天祥大節脇心折

土室猶吟正氣歌

有感

遺却功名萬念休
渾將心事附悠悠
自聞故曰沈淪慘
短笛清砧別有秋

蹟筆内左本橋

有感
遺却功名萬念休渾將心事附悠悠自聞故曰沈淪慘短笛清砧別有秋

毛利登人

(三)幕末の勤王家。福岡藩士。義兵を擧げて捕へられ。元治元年斬らる。

(二)幕末の志士。長州藩士。元治元年獄中に斬らる。

すめらぎの道しるき世を願ふかな

わが身は苔の下にふすとも

平野國臣

大君にさゝげまつりし我が命
いまこそすつる時は來にけれ
なきたまもあはれとおもへ湊川
清きながれのすゑを汲む身は

平野國臣筆蹟

天津風ふく
や錦の旗の
手になびか
ぬ草はあら
じとぞ思ふ
國臣

(一) 幕末の勤王
家。江戸の人。
文久三年獄に
投ぜられ。翌
年殺さる。三
十七。

(二) 志士。下野宇
都宮の人。文
化七年(二四
七〇)歿。

捨_テ生_リ取_リ義_ヲ是_レ男_兒。
好_シ向_フ京_都城_ヲ埋_メ狹_ク骨_ヲ。

四海紛々何所期^(一) 安積五郎
待_テ他_ノ天_ノ定_メ勝_ル人_ノ時_ヲ^(二) 蒲生君平

(一) 慷慨家。名は
正之。上野の
人。寛政五年
自_ラ殺_ス。年三
十四。

(二) 後醍醐天皇。

(三) 正中元年。

比叡の山見おろす方ぞあはれなる
けふ九重のかずし足らねば

高山彦九郎^(一)

我を人と知ろしめすかや皇の
たまの御聲のかゝるうれしさ

二〇 阿新丸 其の一

さるほどに、君の御謀叛を申し勸めけるは源中納言具行
右少辨俊基、日野中納言資朝なり。各死罪に行はるべしと評
定一途に定まりて、まづ去年より佐渡國へ流されておはす
る資朝卿を斬り奉るべしと、其の國の守護本間山城入道に
下知せらる。

此の事京都へ聞えければ、此の資朝の子息邦光の中納言、其の頃は阿新殿とて、歳十三にておはしけるが、父の卿囚人に成り給ひしより、仁和寺邊に隠れて居られけるが、父誅せられ給ふべき由を聞きて、今は何事にか命を惜しむべき。父と共に斬られて冥途の旅の伴をもし、又最後の御有様をも見奉るべし。とて、母に御暇をぞ乞はれける。

母御頻に諫めて、佐渡とやらんは人も通はぬ怖ろしき島とこそ聞ゆれ。日數を経る道なれば、如何にしてか下るべき。其の上汝にさへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えず。と泣悲しみて止めければ、よしや件をひ行く人なくば、如何なる淵瀬にも身を投げて死なん。と申しける間、母、いたく止めなば、又目の前に憂き別もありぬべしと思ひわびて、力

中間

なく、今まで只一人附副ひたる中間を相副へて、遙々と佐渡國へぞ下されける。路遠けれども乗るべき馬も無ければ、履きも習はぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露わくる越路の旅、思ひやるこそ哀れなれ。

都を出でて十日あまりと申すに、越前の敦賀の津に着きにけり。これより商人船に乗りて、程なく佐渡國にぞ着きにける。人してかうといふべき便りも無ければ、自ら本間が館に至りて、中門の前にぞ立ちたりける。折節僧のありけるが、立出でて、此の内への御用にて御立ち候か。又如何なる用にて候ぞ。と問ひければ、阿新殿、これは日野中納言の一子にて候が、此の頃斬られさせ給ふべしと承りて、其の最後の様をも見候はん爲に、都より遙々と尋ね下りて候。といひもあへ

中門

岩木ならず

持佛堂

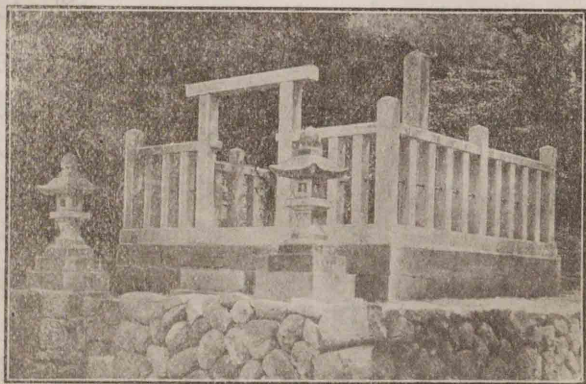
ず、涙をはらくと流しければ、此の僧心ありける人にて、急ぎ此の由を本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすが哀れにや思ひけん、やがて此の僧を以て持佛堂へ誘ひ入れて、踏皮行纏解かせ、足洗ひて、疎ならぬ體にてぞ置きたりける。

冥路の障

鄙の住居
數ならず

阿新殿之を嬉しと思ふにつきても、同じくは父の卿を疾く見奉らばや」といひけれども、今日明日斬らるべき人に之を見せては、なかく冥路の障ともなりぬべし。又關東への聞えも如何あらんずらんとて、父子の對面を許さず、四五町隔りたる處に置きたれば、父の卿は之を聞きて、行末も知らぬ都に、いかゞあらんと思ひやるよりも尙悲し。子は其の方を見やりて、浪路遙かに隔りし鄙の住居を思ひやりて、心苦しく思ひつる涙は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。こ

生を隔つ
無からん後
の苔の下



墓の朝資野日渡佐

れこそ中納言のおはします年の中よとて見やれば、竹の一むら茂りたる處に堀堀廻らし、堀塗りて、行通ふ人も稀なり。情なの本間が心や。父は禁牢せられ、子は未だ幼し。たとひ一所に置きたりとて、何程の怖かあるべきに、對面をだに許さで、まだ同じ世の中ながら、生を隔てたる如くにて、無からん後の苔の下、思ひ寢に見ん夢ならでは、相見ん事もあり難しと、互に悲しむ恩愛の、父子の道こそ哀れなれ。

五月二十九日の暮程に、資朝卿を牢より出し奉りて、遙か

うたてし

に御湯も召され候はぬに、御行水候へ。」と申せば、はや斬らるべき時になりけりと思ひ給ひて、嗚呼、うたてしき事かな。我が最後の様を見ん爲に、遙々と尋ね下りたる幼き者を、一目も見ずして果てぬる事よ。」とばかり宣ひて、其の後は曾て諸事につきて言葉をも出し給はず。今朝までは氣色しをれて、常には涙を押し拭ひ給ひけるが、人間の事に於ては、頭燃を拂ふ如くになりぬと覺りて、たゞ顯密の工夫の外は餘念ありとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄せて乗せ奉り、此處より十町許ある河原へ出し奉り、輿舁きすゑたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直りて、辭世の頌を書き給ふ。

五蘊假成形。

四大今歸空。

顯密の工夫

將首當白刃。

截斷一陣風。

法談

年號、月日の下に名字を書きつけて、筆を擱き給へば、斬手後へ廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、體は猶坐せるが如し。此の程常に法談なんどし給ひける僧來て、葬禮式の如く取營み、空しき骨を拾ひて、阿新に奉りければ、阿新之を一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、今生の對面遂に叶はずして、變れる白骨を見る事よ。」と泣悲しむも理なり。

二一 阿新丸 其の二

所存

阿新未だ幼稚なれども、けなげなる所存ありければ、父の遺骨をば只一人召使ひける中間に持たせて、まづ我より先に高野山に参りて、奥の院とかやに納めよ。」とて、都へ歸し上

勞ること

ひねもす

せ、我が身は勞ることある由にて、尙本間が館にぞ留りける。これ本間が情なく、父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふ故なり。かくて四五日經ける程に、阿新晝は病の由にてひねもすに臥し、夜は忍びやかにぬけ出でて、本間が寢處なんど細々に伺ひて、隙あらばかの入道父子が間に、一人刺殺して、腹切らんずるものと思ひ定めてぞ狙ひける。

遠侍

或夜雨風烈しく吹きて、宿直する郎等共も皆遠侍に臥したりければ、今こそ待つ處の幸よと思ひて、本間が寢處の方を忍びて伺ふに、本間が運や強かりけん、今夜は常の寢處を變へて、いづくにありとも見えぬ。又二間なる處に燈の影の見えけるを、これは若し本間入道が子息にてやあらん。それ

すはや

なりとも討ちて恨を散せんと、ぬけ入りて之を見るに、それさへ爰には無くして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふ者ぞ只一人臥したりける。よしやこれも時にとりては親の敵なり。山城入道に劣るまじと思ひて、走り掛らんとするに、我は元來太刀も刀も持たず、たゞ人の太刀を我が物と憑みたるに、燈殊に明らかなれば、立寄らばやがて驚き合ふ事もやあらんずらんと危みて、左右なく寄り得ず、如何せんとか案じ煩ひて立ちたるに、折節夏なれば、燈の影を見て、蛾といふ蟲の、數多明障子に取りつきたるを、すはや究竟の事こそあれと思ひて、障子を少し引きあげたれば、此の蟲數多内へ入りて、やがて燈を打消しぬ。今はかうと嬉しくて、本間三郎が枕に立寄りて探るに、太刀も刀も枕にありて、主はいたく

はたと蹴る

寝入りたり。まづ刀を取りて腰にさし、太刀を抜きて胸元に當て、寝たる者を殺すは死人を殺すに同じければ、驚かさんと思ひて、まづ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚く所を、一の太刀に臍の上を疊までつと突通し、返す太刀に喉笛さし切りて、心靜かに後の竹原の中にぞ隠れける。本間三郎が一の太刀に胸を通されて、あつといふ聲に、番衆も驚き騒ぎて、火を點して之を見るに、血のつきたる小さき足跡あり。さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出でし。搜し出でて打殺せ。とて、手にく松明を點し、木の下、草の蔭まで、残る處なくぞ搜しける。

阿新は竹原の中に隠れながら、今はいづくへか遁るべき。人手に掛らんよりは自害をせばやと思はれけるが、憎しと

思ふ親の敵をば討ちつ。今はいかにもして命を全うして君の御用にもたち、父の素意をも達したらんこそ、忠臣、孝子の義にてもあらんずれ。もしやと一まづ落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛越えんとしけるが、口二丈、深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべきやうもなかりけり。されば之を橋にして渡らんよと思ひて、堀の上に末靡きたる吳竹の梢へ、さらさらと登りたれば、竹の末堀の向ふへ靡き伏して、やすくと堀をば越えてけり。夜は未だ深し、湊の方へ行きて、船に乗りてこそ陸へは着かめと思ひて、たどるく浦の方へ行く程に、夜もはや次第に明離れて、忍ぶべき道も無ければ、身を隠さんとして日を暮し、麻や蓬の生ひ茂りたる中に隠れ居たれば、追手どもとおぼしき者ども百四五十騎馳散りて、もし

十二三ばかりなる兒や通りつる。と、道に行逢ふ人毎に問ふ音してぞ過行きける。

擁護の眸を廻らす

阿新其の日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと志して、そことも知らず行く程に、孝行の志を感じて、佛神擁護の眸をや廻らされけん、年老いたる山伏一人行逢ひたり。此の兒の有様を見て痛ましくや思ひけん、これはいづくよりいづくをさして御渡り候ぞ、と問ひければ、阿新事の様をありの儘にぞ語りける。山伏之を聞きて、我此の人を助けずば、只今の程にかはゆき目を見るべしと思ひければ、御心安く思し召され候へ。湊に商人船共多く候へば、乗せ奉りて、越後、越中の方まで送りつけ進らすべし。といひて、足たゆめば此の兒を肩に乗せ、背に負ひて、程なく湊にぞ着きける。夜明け

かはゆき目

聲を帆に上

て、便船やあると尋ねけるに、折節湊の内に船一艘も無かりけり。如何せんと求むる所に、遙かの沖に乗浮べたる大船、順風になりぬと悦びて、櫓を立て、篷をまく。山伏手を舉げて、其の船これへ寄せてたび給へ。便船申さん。とよばはりけれど、曾て耳にも聞入れず。船人聲を帆に上げて、湊の外へ漕出す。

柿の衣の露をむすぶ
数いらたか珠

勤行
肝膽を碎く

山伏大きに腹を立て、柿の衣の露をむすびて肩にかけ、沖行く船に立向ひて、いらたか珠數をさら〜とおし揉みて、『二持秘密咒、生々而加護、奉仕修行者、猶如薄伽梵。』といへり。況や多年の勤行に於てをや。明王の本誓あやまらずば、權現、金剛童子、天龍夜叉、八大龍王、其の船此方へ漕返してたばせ給へ。と、跳り上り、跳り上り、肝膽を碎きてぞ祈りける。行者の祈

鰐口の死

神に通じて、明王擁護やし給ひけん、沖の方より俄に悪風吹
 來りて、此の船忽ちに覆らんとしける間、船人どもあわて、
 山伏の御坊まづ我等を御助け候へ。と手をあはせ膝を屈め、
 手にく船を漕ぎもどす。汀近くなりければ、船頭船より飛
 下りて兒を肩に乗せ、山伏の手を引き屋形の内に入りたれ
 ば、風は又もとの如くに直りて、船は湊を出でにける。
 其の後追手ども百四五十騎馳來り、遠淺に馬をひかへて、
 「あの船とまれ。」と招けども、船人之を見ぬよしにて、順風に帆
 を揚げたれば、船は其の日の暮程に、越後の府にぞ着きにけ
 る。阿新、山伏に助けられて、鰐口の死を遁れしも、明王加護の
 御誓、いちじるかりけるしるしなり。

——太平記——

二二 實體實相

松 浦 一

すべて物の實體實相は、全部を解放した處にあり、區別を
 超越した處にありまして、それから生じて來る實體實相の
 威嚴は、想像するに難いことではありませぬが、其の例證に、
 私が非常に面白く感じた和歌の話を舉げて見ませう。

長野義言の「歌の大武根」に、或尼が盜賊に縛られながら和
 歌を詠んだところが、盜賊は其の和歌に、ひどく感動してし
 まつて、奪つた物までも返して逃げてしまつたといふ奥ゆ
 かしい話が書いてあります。

近き頃彦根に慈門といへる尼、若くて世を遁れ、里根と
 いふかたはらなる所に庵を占めて住みけるに、一夜盜人
 ども忍び入りて尼を搦めおき、物など奪はんとせしに、尼

(一)伊勢の歌人。
 彦根侯井伊直
 弼に擯用せら
 る。文久二年
 (一八五二)年
 歿。年四十八。

搦められながら詠みける、

よし垣ももとは難波のあしなれば

こすもことわりよるのしら波

此の歌を聞きて、盗人ども尼をもゆるし、物みを返して、出でいにけり。意は、世を遁れ来て棲める庵のよし垣も、元は難波の浦に生ひたる蘆と同じ類のものなれば、今宵しも白波の越えて入りしは理なり。かゝれば身は遁れても、世を隔つる垣はなきぞと感じ諦めたるを、情深く哀れに言ひなしたるにて、是も詞には盗人すなといへるならねども、同じ世にふる人なれば、いかでか感じ實にもと思ふ心なからん。こゝの白波は盗人の事なり。

日本文學に歌の徳が靈妙なる力を現すといふ話が澤山

眞髓

感得

朴直

あり、又これを仕組んだ作品が澤山あるのは、日本人が昔から文學に一種の神性を感じ、其處に靈的の意味を理解する事が一般に出來て居たといふ事を示すものでありますから、此の點だけでも、文學的に日本人は世界に誇ることが出来るのであります。それは文學といつても歌に留るのではなにか。といふ人があるかも知れませぬが、詩歌は文學の眞髓であります。歌についてこれだけの感得が自由に出來れば、十分であります。此の點については、明治に始つた新日本の日本人は、却つて舊日本の日本人よりも、文學的に墮落して居りはしないかと思はれます。理窟をいふことを知らずして、率直に物の精神に觸るゝことの出來たのが、舊日本の特色であります。理窟をいふことは巧になつたけれども、朴

直と親切と、随つて物の精神を眞に感じ、全心を傾注して事物を尊敬し崇拝することが出来なくなつたのが、新日本の遜色であります。

さて此の歌の貴い處は、限界が固りついて居る浮世の垣を、其の儘に僧庵の周圍に取周らしたものであるから、俗縁を斷つたと思つて居た身でも、やはり俗縁に繋がれて居た。俗縁に繋がれてゐる者が、俗縁で盜賊にはいられても、致方ない次第であると悟つた其の一つの悟にあります。此の悟にはいつてしまへば、垣を結んだのが己に誤である。尼は縛られても盜人を怨まない、又盜人に盜みをするなど訓戒もしない。其の怨まず、戒めず、自己の心の垣を撤して、區別もなく、區劃もなく、一切を解放して、分つことも出来ず、集むること

俗縁に繋が
る

心の垣を撤
す

とも出来ぬ自分といふものゝ實體を抛げだした處に、賊を威壓し、吾々を威壓する力が生じて來たのであります。かういふ例は、唯歌の徳といふばかりではありませぬから、高德の上人の間には、これに類した話は澤山にあります。要するに、一切のものが此の實體と威嚴との境涯まで行かなければ、未熟でなければ虚偽であると思ふのであります。

—文學の本質—

二三 日蓮上人 其の一

高山林次郎

此の世の中で眞に偉大なる事業といふのは、何も戦争に勝つたり、國を取つたりする事のみでは無い。少年の心には、とかく頼朝や太閤の様に、天下を取つたり、外國を征伐した

覇權

[Aristotles. 有名なる希臘の哲學者(西紀前三八四—三二二)]
[Jesus Christ.]

(三) 共に地名。

りするのが、眞に英雄の事業の如くに思はれ、文藝や宗教の上の成功などは、さ程に尊ぶに足らぬ事の様に思はるゝであらうが、これは大いなる誤である。敵を征服し城を屠る事も難事ではあるが、人の精神を征服し、千百年の後世までも其の勢力を有することは、人間の事業としては更に大きく、又更に尊むべきことではあるまいか。歴山大帝の遺業も、羅馬帝國の覇權も、其の時々(一)の榮落に過ぎずして、今日に於ては何の跡形も無いが、アリストートル(二)の學術や、基督(三)の教は、今日も猶昔の如く、人の心を支配し感化して居る。春秋戰國の王覇の争も、支那の歴史に空しき文字を留めたばかりであるが、其の當時に、陳蔡(四)の野に飢ゑた孔子(五)の教は、今もなほ東洋文明の根據となつてゐる。世に所謂英雄豪傑の事業は、

野心家

快哉を叫ぶ

[Thomas Carlyle. 英國の文學家、歴史家。(西曆一七九一—一八八〇)]

[William Shakespeare. 英國の劇作家。世界最大の文豪と稱せらる。(西曆一五六四—一六一六)]

情操

壯快は壯快であるが、畢竟一時の野心家の野心を満足せしむる外に、多く後世に影響を與ふるものではない。これを喩へるならば、ちやうど仕掛花火の、一時人目を眩まして、覺えず快哉を叫ばれるが、間もなく消去つてもとの暗黒に立ちかへるやうなものだ。これを文藝や宗教の勢力の、深大にして且永久なるに比べれば、事業の價值何れが大なるか、自ら明らかであらうと思ふ。されば英國の哲人(一)カーライルは、英吉利が一人のシェイクスピアを有することは、印度帝國を有するよりも尊いと言つた。

又人物の上から見ても、眞に大なる人物とは、其の理想高尚にして品性尊く、且意力情操の絶大純潔なる人を謂ふのである。其の所謂英雄豪傑と呼ばれる人の中には、其の表面

東家西家
時勢の寵兒

の仕事こそ人並以上に大きい、其の品性のこれに伴なうて高潔なのは極めて乏しい。つまり彼等の多くは、境遇の幸なりしが爲に、おのれ眞に之に當るべき才器品性をなくして、偶然に大事を成遂げたものが多い。例へば高山の上に吹上げられた種子が其處に成長して、亭々として天際に聳ゆるやうなものである。もし禪一貫の赤裸にして突出したならば、東家西家の權兵衛八兵衛同様の人間でないものが幾人あるであらうか。一言すれば、彼等の多くは、所謂時勢の寵兒であるからである。

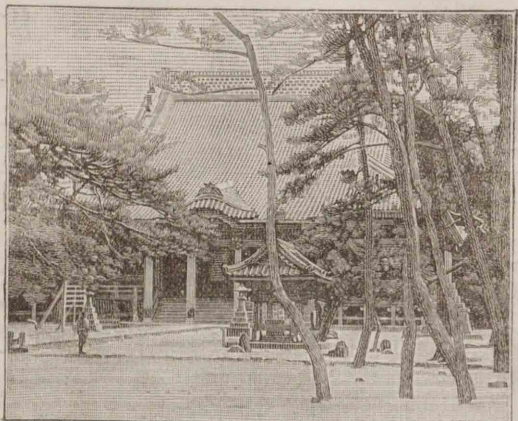
二四 日蓮上人 其の二

日蓮上人は其の人物に於ても、其の事業に於ても、眞に偉

(一)安房國安房郡
天津町の北
山上に清澄寺
あり。

故山

大覇府



安房小湊誕生寺

大と稱せらるべき人であつた。

まづ其の事蹟から考へて見ても、安房の一漁師の子に生れ、幼より出家して清澄山に上り、後叡山に學び、十二年の遊學の後、當時に行はれたる佛教諸宗門の、何れも教祖なる釋迦の眞意に達へるものなることを悟り、其の故山に歸つて始めて法華の新宗門を開いたが、聞く者皆狂として取合はず、却つて在來の宗門を罵詈したのを怒つて、彼を殺さうとした者すらあつた。日蓮は遁れて鎌倉に到り、淨土や禪宗の全盛を極めつゝあるこの大

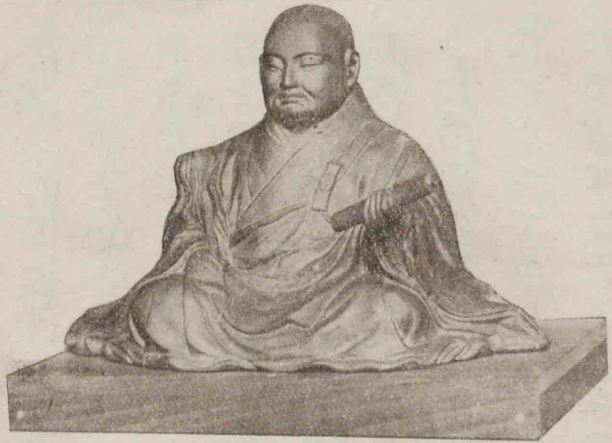
(一)相模國鎌倉郡川口村龍口寺の地かといふ。

覇府の大道に立つて、念佛者は無間地獄に墮つべし、禪は天魔の業ぞと大呼したので、執權北條氏の怒に觸れて、一度は伊豆に流され、二度は佐渡に流され、其の間、或は暴民の爲に庵室を焼れ、或は龍口(一)に引れて首斬られんとし、或は敵人に要撃されて命を落さんとし、其の他、刀杖瓦石の災難、其の數を知らず、前後凡そ二十二年の間、席煖るに違なく、生疵の身に絶ゆる間は殆ど無かつたとの事である。

日蓮の受けた迫害は、實に慘酷極つたものであつた。そして其の時間も一年ならず、二年ならず、三五年乃至十年ならず、實に二十二年の長い間であつた。彼は長い二十二年の間、絶えず自己の信じたる眞理を飽くまで宣傳し、生死の間に出入して、泰然として動かなかつた。常に「この臭き軀を

宣傳
生死の間に
出入す

法華經に捧ぐるは、砂を黄金に代へ、糞を米に換ふるなり。」と



日蓮上人木像

いひ、假令日本國の位を以て誘ふとも、父母の頸を切らんと脅すとも、我は決して是の眞理をば捨てじ。其の外の大難は風の前の塵なるべし。」と宣言して、天下何恐るゝ所なく、憚る所なく、聲の根の枯れざる限り、筆の毛の續かん限り、正堂々と天下に呼號した。法然(一)や親鸞のやうに、朝家權門の知己あるのではなく、天上天下介然孤立の身を以て、滿天下の僧侶を敵として、折伏の法鼓を鳴し、時の執權たる北條氏を逆賊と

呼號す
(一)淨土宗の開祖源空のこ。一建曆二年(一八七二)寂。一八七七年七十。
(二)眞宗の開祖。本願寺の開基。弘長二年(一〇九二)寂。一〇九九年九十。
介然孤立
法鼓

呼ばはり、僅かの小島の主と卑しんだ其の態度の雄々しさ、男らしさは、實に我が邦の歴史に類例の無い事であつた。

古人の語に、一義を執つて十年を踰ゆるものは必ず眞面目なりといふ事がある。日蓮は二十二年の長い月日の間、常に生死の間に入しなから、其の眞理と信奉せる法華經を説いた。これ程の眞面目が又と世にあるであらうか。されば天も人も次第に是の至誠の聲に靡いて、其の教は漸く都鄙に擴り、淨土、禪宗の僧侶共も追々と改宗して、念佛の代りに唱題の響がだんくと高くなつた。北條より足利の時代になつてからは、この宗門の勢は益々盛大となり、戰國時代にありては、天下の寺院の中にて法華その半ばを占めたとのこと。今日では眞宗の全盛に壓倒されたが、それでも尙日

辛辣激越

本國の大宗門たるを失はぬ。是皆日蓮の遺業の餘澤である。それで日蓮の人物はどうであるかといふと、決して世人の多く信ずる様な剛情我慢一方の人では無い。七大寺の寺塔を焼拂ひて、彼等の頸を由井ヶ濱に斬らずば、日本國必ず亡ぶべし。など痛言したあたりは、實に辛辣激越の極みではあるが、其の裏面に温潤玉の如き愛情が、春の泉の様に溢れて居つた。夫婦の愛情に對しても常に深厚なる同情を寄せられ、孝順の情に至つては、實に後人を感動せしめるに足る美蹟を遺した。即ち六十近き老境に至りながら、尙父母を懷慕するの情に堪へず、身延の山に引籠つてからも、毎日五十餘町もある險山を攀登つて、遙か生國房州の空を拜んだといふことは、實に孝行の鑑といふべきではないか。これが一

傾學

勇猛心
…底の…

月、二月の事ではない、雨の日も、雪の日も、九年の長い間、一日も缺さなかつたといふに至つては、眞に驚嘆の外は無いは無いか。かういふ慈悲愛情の話が、上人の生涯には外にも甚だ多い。世人が折伏の側の上人のみを見て、單に強情我慢の一狂僧と思ふのは、全く上人の人物を知らぬことを自白するに等しい。これを要するに、上人は知識に於ては當時の如何なる碩學にも匹敵し得べき深大なる素養を有し、又其の威力に於ては、生死を顧ずして其の信念所志を貫徹するの大勇猛心を有し、又其の感情に於ては、温潤閑雅、所謂大丈夫の俠骨は婦女子の柔腸を妨げざる底の人情をもつたのである。

—樗牛全集—

二五 百花譜

大町 桂 月

郊原一路、満目すべて薄なり。夕陽沈まんとして、雲色哀しみ、西風冷かにして、酸たる鳥聲秋の恨を語る。馬の嘶く聲まづ聞え、小歌聞えて近づくを見れば、若き農夫馬背にあり。手綱は鞍にあづけたるまゝにて、馬の自ら歩むは熟せる路にや。鴉飛びつくして四面寥廓たり。ふと顧れば、招く尾花の末に、一團の大月明らかなり。

雀の聲滑なる冬の日和、日影暖に圓窓を射て、火鉢の火も消えかゝれり。室淨うして點塵なし。床の間の俗氣なき畫幅の下、水仙三つ四つ露を帯びたり。老人二人靜かに局に對して子を下す聲、時に丁々として響く。

桃花數株、茅屋を圍みて、鶏聲午なり。桔槔動かずして一犬

桔槔

局に對す
子を下す

機杼

門外に眠り、屋内よりは鄙びたる歌の聲、機杼の聲と共に洩
来る。

一泓

一泓の池水半ばこれ蓮花。白や紅や影を水に落して、水に
花あり。健鯉時に躍りて、波文岸に及ぶ。水榭深く鎖して、人籟
なし。曉煙垂柳を罩めて、日未だ昇らず。

波文
人籟

流るとしも
なき

流るとしもなき里川、底は泥なれども水は澄みたり。こな
たは小徑行人なく、かなたに椿自ら垣になりて、多く花を着
けたり。流鶯時に一聲、思ひがけずも大輪の花ぼとりと水に
落ちて、水暫くは文をなす。

流鶯

村はづれに岐路ありて、問はんとするに人なし。馬頭觀世
音の石像、頑として物いはず。側に生出でたる幾莖の女郎花
なよくとして風にもだゆ。

同伴なくて詩を思ひつゝ、辿る山路、到る處櫻花多し。春風
一陣、空に晴雪を散し、地に綾の筵を敷く。
池畔の掛茶屋、少女欄に凭り、手をうちて鯉を呼ぶ。穉兒立
ちて麩を投ぐ。柵上の藤花累々としてさがりて、人の頭に及
ばんとす。

麥浪

麥浪に連る一面の菜花。菜花や黄、麥浪や綠。滿地皆色あり、
行人絶えて遊絲のどかにかゝり、一双の胡蝶追逐し、去つて
行く處を知らず。

遊絲

夏の日暑く、山路峻しく、喘ぎく上るに、渴を催して堪へ
難き時、水音聞えていと嬉しく、荆莽を排して之に就けば、急
湍清玉を迸らす。一掬、二掬、三掬、漸く蘇生の思をなして、ふと
目を注げば、苔滑なる巖の上に、百合の花危げに立てり。折ら

清玉を迸ら
す

んと欲して折るに忍びず。立別れんとすれば、滋き水のしぶきに、花涙を含むが如し。

白鷺の小首傾けて立てる洲邊、蘆花雪を吹く。夕陽傾きて、柳影長き隄の上、往きかふ人なし。巨蟹這ひいでて泡を吐きつゝ、螯を舉げて空を挟む。

馬に食ません料とにや、利鎌を朝日にきらめかして、露ながら刈りたる草の一束、背に載せて歸りゆく田舎少女、知りてか、知らずてか、其の草の中に桔梗一枝まじれり。

鸚鵡語りつくして日暮れんとす。人を待てどもいたらず。蕭々たる細雨、庭の海棠に瀝ぐ。

—春草秋草—

二六 三つの眺 其の一

煌々

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休息の夜を照す。月の光は温和で、日光のやうに峻烈ではない。

群陰皆影を伏す

日は赫々として仰いで見る事も出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は悉く照破せられるが、月輪は萬象を一つに包んで、

有象無象

貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴はない清涼の光である。皎潔

無垢、崇美と稱ふべき優しい光である。休息、安靜の夜には最もふさはしい此の光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じず

詩的情緒

る。詩的情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と闘つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであら

(一)賀茂真淵の門人荷田蒼生子の歌。

うが、隈なく世界を照す月光の、人の胸懷にしみ渡る事は、恰も其の影の、千草の露の玉毎に宿るやうなものである。^(一)うち向ふ月は一つの影ながら、浮ぶは千々の思なりけり。である。東西古今、悲喜哀歡の情熱は幾萬回となく、幾億回となく、此の光に向つて訴へられた。之を嗟歎し、之を吟咏した詩歌の感吟は、世界各國の文學に充ち満ちて居る。天文學者はいふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。と。此の冷たい光が、古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又現に與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。

古往今來

乾坤を一つにす

(二)新編古今集。僧仙覺の歌。

雪は月よりも一層冷たい。貧富、貴賤の差別なく、其の純潔の色を以て乾坤を一つにする事は、月に似た點が多い。高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。花ならば咲かぬ梢もまじら

(一)唐の詩人白樂天の句。

瓊玉を敷く

對照の妙

まし、なべて雪降るみ吉野の山。といふやうに、眼に入る物、悉く其の下に包まれてしまふ。^(一)三千世界銀成色。十二樓臺玉作層。の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來る此の純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、瞬く中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉色々の眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新緑の色も、目のさめるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉も無い冬枯の時に、地上の萬物が此の銀色に掩はれるのは、眞に對

變化の奇

照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものでないか。一年中、蓮の花の咲いて居る極樂淨土は、決して我等の世界ほど楽しいものではなからう。

二七 三つの眺 其の二

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としては餘りに贅澤を感じもする。花は美しい色の外に、香しい匂さへ有つて居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價を生じたのは無理は無い

(一) 年ふればか
は老いぬし
はあれどし
をし見れば物
思もなし
古今集 藤原
長房

が、山の花、野の花、いづれも月雪と同じやうに、一文錢を要せぬのも嬉しい。人世に花なくんば、どれ程寂寞を感じるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで其の濫用を慎んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。死んでも花を忘れぬのである。月雪の眺は、其の皎潔を愛し、其の清淨を貴ぶが、花は其の艶麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美、華麗、華奢等の語は、皆花に基づいたものである。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余は唯、花をし見れば物思もなし。といふ古歌を以て、總べてを總括し得べしと信ずる。

月雪花三つの眺は、各其の特長がある。いづれを前、いづれ

(一)新古今集。康
資王の母の
歌。

を後といふことが出来ぬ

山(一)ざくら花の下風吹きにけり

木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪に譬へたのである。

ふゆ(二)ながら空より花の散りくるは

雲のあなたは春にやあるらん

これは雪を花に譬へたのである。

笠(三)は重し吳山の雪。鞋はかんばし楚地の花。肩上の笠に

は無影(三)の月を傾け、擔頭の柴には不香(三)の花を手折る。

これは雪を月と花とに譬へたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪を賞でぬ人も無い。

思へ、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷

(二)古今集、清原
深養父の歌。

(三)謡曲「葛城」の
句。

不夜城

(一)伊藤仁齋の
歌。

(二)唐の劉廷芝が
「代」三日前
翁上」の詩中の
句。

雪に鎖されてゐる極北の國では、氷は即ち人の家である。此の地方の人には寸紅の目を楽しましめるものも無い。又之に反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇観は見たことが無い。瓦斯、電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華を倫敦の住民も、秋冬の半年は、美しい月の光を見ることが出来ない。我等日本人が、昔も今も此の三つの眺を擅(一)にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は、古人の歴史が加つて一層の感興が増す。世世を経てながめし人の數にまた、我をもゆるせ秋の夜の月。月(二)は古來の歴史を照す鏡である。年年歳歳花相似。歳歳年年人不同。人生の感は花を見て益繁く、雪を見て愈多(二)い。二千五

百年以來、月雪花三つの眺を有し得たる我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へたるよ、如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。

二八 博雅の三位

今は昔、源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿克明親王と申す人の子なり。萬の事に勝れてありける中にも、管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえならず吹きけり。此の人村上の御時に四位の殿上人にてありけり。其の時に逢坂の關に一人の盲庵めくらを造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の宮の雜色にてなんありける。其の宮は宇多法

雜色

えならず

いみじ

あながちに
好む

皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなん微妙に弾く。然る間、此の博雅此の道をあながちに好みて求めけるに、彼の逢坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば行かずして、人を以て内々に蟬丸に言はせけるやう、など思ひかけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかし。と盲之を聞きて、其の答をばせずして曰く、

よの中はとともかくても過してん

宮もわら屋もはてしなれば

と使歸りて此の由を語りければ、博雅これを聞きて、愈、其のみやびの心に感じ、思ふやう、われ音樂の道を好むによりて、

此の盲にあはんと思ふ心深し。されどこの盲の命いつまで
 あらんもはかり難し。わが命も知り難し。琵琶に流泉、啄木と
 いふ曲あり。これは世に絶えぬべきことなり。唯此の盲のみ
 こそ之を知りたるなれ。かまへてこれが弾くを聞かん。と思
 ひて、夜彼の逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸其の曲を
 弾くこと無かりければ、其の後三年の間、夜々逢坂の盲が庵
 の邊に行きて、其の曲を今や弾く今や弾くと密かに立聞き
 けれども、更に弾かざりけるに、三年といふ八月の十五日の
 夜、月少しうはぐもりて風少し打吹きたりけるに、博雅、あは
 れ、今宵は興あり。逢坂の盲今夜こそ流泉、啄木は弾くらめ。と
 思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶をかき鳴して物
 哀れに思へる氣色なり。博雅之を極めて嬉しく思ひて聞く

程に、盲獨り心をやりて詠じて曰く、

逢坂の關のあらしのはげしきに

しひてぞ居たる世をすどすとて

とて琵琶を鳴したるに、博雅之を聞きて、涙をながしてあは
 れと思ふこと限り無し。盲獨言に曰く、あはれ興ある夜かな。
 若し我にあらぬ數寄者や世にあらん。今夜心えたらん人の
 來よかし。物語せん。といふを、博雅聞きて聲を出して、王城に
 在る博雅といふ者こそ之に來たれ。といひければ、盲の曰く、
 「かく申すは誰にかおはする。」と。博雅の曰く、我はしかくの
 人なり。あながちに此の道を好むによりて、此の三年此の庵
 のあたりに來つるに、幸に今宵汝に會ふ。と。盲之を聞きて喜
 ぶ。其の時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物

數寄者

かたみに

語などして、博雅、流泉、啄木の手を聴かん。といふ。盲、故宮はかくなん、彈き給ひし。とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもて之を習ひて、返す返す喜びて、曉に歸りにけり。

之を思ふに、諸の道は只かくの如く好むべきなり。それに近代は實に然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸いやしき者なりと雖も、年ごろ宮の彈き給へる琵琶を聴きて、極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりければ、逢坂には居たるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなん語り傳へたるとや。——今昔物語による——

自修文

一 書 齋

井上哲次郎

(一) 哲學者。文學博士。福岡縣國大學教授。縦横散亂はら／＼にちる。其の處を得る。それ／＼と、不淨きたない物。反射光が物に中つて照りかへすこと。頭腦の反射とは、其の人の知識の表示の意。燕雜雜草が生ひ茂つてゐるやうに取ららしめてゐること。亂雜と同じ。

書齋は出來得べきだけ清淨にし、且之を神聖に保たなければなりません。朝に夕に或は書き或は讀むことを爲す所でありますから、書冊、筆墨の類の縦横散亂することは免れないのであります。出來得べきだけ筆墨、紙冊等悉く其の處を得て能く整頓するやうに努め、亂雜を戒むべきことであります。殊に有形無形の不淨を避けることが必要であります。それといふのは、書齋は書齋の主人公に取つては其の頭腦の次であります。否むしろ書齋は頭腦の反射であります。書齋の状態如何は、其の主人公の精神状態の如何を現して居るものであります。書齋を亂雜燕雜ならしめて一向平氣で居るといふやうなことになるば、やはり其の人の精神状態がさういふ有様であるので

批評的觀念
物の是非を分
つ考。

あります。精神状態が亂雜蕪雜に堪へることが出來ず、悉く正確に、悉く純潔ならしめようといふ鋭敏な批評的觀念を以て滿されて居りますれば、其の書齋の状態も之に相應するやうになつて來るといふのは、必然の結果であります。又其の書齋の中に如何なる書類が陳列してあるか、其の愛讀して居る書類は如何なる性質のものであるか、高尚であるか、野卑であるか、若し極めて野卑な小説及び其の他蕪雜な雜書類であれば、やはり其の主人公の嗜好が極めて野卑であり、蕪雜であることを現して居る。若し又其の書類が哲學、宗教、文學、科學など高尚な方面のものでありますれば、其の主人公がさういふ嗜好を有つて居るに相違ありません。それで書齋の中の有様によつて、主人公の性質が分る譯であります。書齋の有様は主人公の精神の反射であります。それですから、主人公の頭腦の中即ち精神が純潔でなければならぬやうに、書齋も亦純潔でなければなりません。純潔で且整頓された書齋の中に於てのみ、眞に興味あり、秩序ある讀書はなし得られるのであります。書齋の中には平生最も愛讀する書類、及び書類講讀に缺くべからざる字書類の

世故
世の中のいろ
いろの事。
達観
物事の先の先
までひろく見
通すこと。

自我

(一)東圃と號す。
國文學者、文
學博士。加賀
金澤の人。明
治四十二年
歿。年四十一。
(二)大和國吉野郡
なる吉野山の
稱。
(三)元明天皇の和
曆三年から延
暦三年まで八
代七十年間の
間帝が奈良の
稱にあつた間
の事。

如きも、座右に備へて置かなければならぬのであります。又古今といはず、東西といはず、其の最も敬慕して居る偉人、傑士、もしくは聖人の肖像又は筆蹟等を壁間に掛けて、朝に夕に親しく之に接するといふことも、なかく趣味あるものであります。また年の若いうちは、書畫に就いてさ程の趣味を生ずるものではありませんが、漸く經驗を積み、世故に熟練し、人事を達觀した後、古人の書畫を壁間に掛けて之を眺める時は、一種いふべからざる趣味を生ずるものであります。若し又廣大な書齋でありますれば、世界の地圖もしくは日本の地圖等を掛けるのも甚だ有益であります。かくの如く多く書籍を集め、又書籍を清潔にし、古人の肖像筆蹟等を掲げて裝飾した以上は、愈々以て其の主人公の頭腦を象る譯であつて、自我と書齋とは決して離るべからざる關係を生じて來るのであります。

二 吉野と嵐山

(一) 藤岡作太郎

(二) 吉野は奈良時代以前より歌にも詠まれて、名高き所なるが、初は吉野川の

香雲

雲にほひのある花の長く咲續いて居るのをいふ。

(一)延暦十三年帝

都の京都に遷

されてから平

家の滅亡に至

るまでの間に

いふ。

(二)大和國吉野郡

に屬す。

(三)金峯神社の奥

の院。

一目千本

櫻樹が一目で

千本も見渡さ

れるのでい

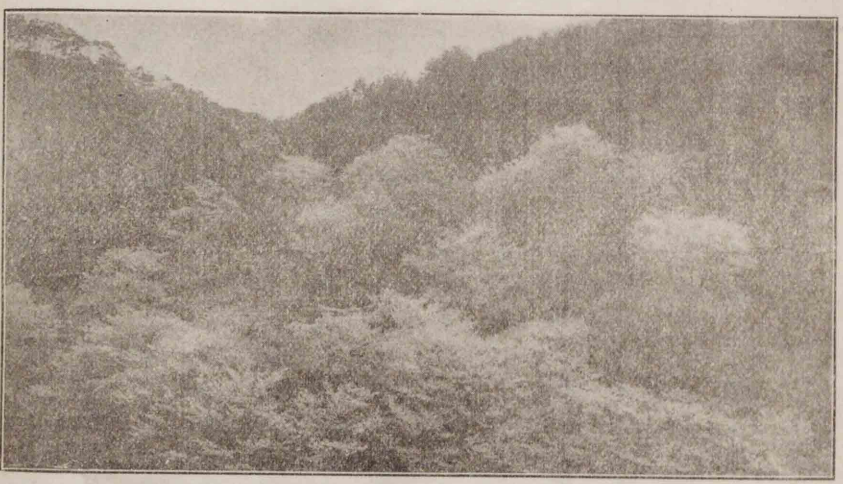
ふ。

ある。

ある。

ある。

ある。



清き流を賞して、水邊に離宮をも設けられしなり。香雲はるかにたなびきて、日本一の花の名所といはれしは、平安時代此の方なるべし。
吉野川を渡れば、六田の里あり。此より坂になりて吉野山に入る。奥の院まで二里餘の間に、櫻の多き所、下と中と、上と三箇所ありて、稍開落の時を異にす。下の一目千本最も壯觀なり。總じて吉野は、馬の背のやうなる山の上に町ありて、そこより谷の櫻を見下すなり。花は一重の山櫻にて、赤き若葉の間に優しく瘦せて咲く。肥えて派手なる姿はなけれど、千朶萬朶、山一杯に咲満ちたるを望めば、古人の

香雲
雲にほひのある花の長く咲續いて居るのをいふ。
(一)延暦十三年帝都の京都に遷されてから平家の滅亡に至るまでの間にいふ。
(二)大和國吉野郡に屬す。
(三)金峯神社の奥の院。
一目千本
櫻樹が一目で千本も見渡されるのでいふ。
ある。

頷かる

承知される。

(一)歌書よりも

軍書に悲しむ

吉野山。各務

吉野朝時代の

戦記物をい

ふ。

(二)天武天皇。

義經は兄頼朝

と不和になり

西へ奔らう

として風波に

さへぎられ、

従者と共に此

の山に入つ

た。

(四)護良親王。

(五)山寺の春の

夕暮來て見れ

ば、入相の鐘

に花ぞ散りけ

る。(新古今

集能因法師)

(六)古陵松柏吼

天賦。山寺尋

雪老僧時輟

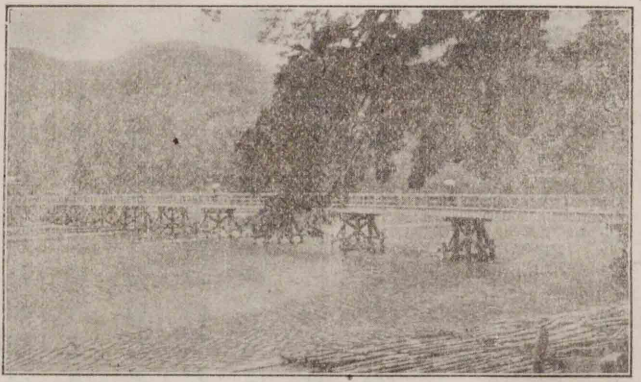
帝。落花深處

説。南朝。詩

井竹外。蘇

意は、後醍醐

天皇の御陵の



吉野の花盛を賞めたる詩歌は數へも盡されねど、此の山は又歴史上の舊跡として遊人の心を動かし、歌書よりも軍書に悲しむといはれたり。大海人皇子がこゝに潜み給ひしを始として、義經主従は嶺の白雪に蹈迷ひ、大塔宮の軍敗れて、村上義光父子は春の花と散りぬ。其のち吉野時代の皇居として、至尊が山里の御起臥、いかに心苦しくましましけん、山寺の春の夕暮來て見れば、春寂寥にして、老僧帚の手をやめて、落花深き處に昔語をするもあはれにこそ。
吉野の花に惜しむべきは、水の眺のなき事なり。

吉野川程近く麓を走れども、花の山より川は見えず、水の邊に花は無し、隅田河畔の向島は花と水と長く相沿ひたれど、山を見ず、花と水と山と共に備

二 吉野と嵐山

吹く風に叫び、如く輪堂の花も散つて春も既にものさきびしく、た白い眉の僧に庭掃除の手を休めて、花のちりしく所を吉野朝の昔を語るのみである。

いやが上

(一)第八十八代。

(二)山城國葛野郡。太秦附近より以西、嵐山に至るの汎稱。

(三)靈龜山と號す。山城國葛野郡。嵯峨村大字。龍寺に在る。京都五山の。

(四)米國の文豪ホ

ンソンの小品

集中の一章を

譯す。

(五)名は退蔵。明

治の文學者。

外國文學として

紹介された。

David.

David.

(1) Boston.
米國東海岸の
大都會。

れるは嵐山なり。保津川の流深く山を劈き、丹波より山城に入る。其の峽の將に開けんとする處に此の山あり。山は覆りて淵に墜ちんとし、水は衝いて麓を穿たんとす。松の翠いやが上に茂りたる中に、花の雲、紅葉の錦畫よりも美しく、夏の涼みにもよろしく、雪の降りたるは尙更面白く、四季の景色、いづとして佳ならざるはなし。

嵐山の櫻も吉野の種なり。平安時代にも既に此の地は類なき勝地として知られしが、其の頃はなほ秋の紅葉ばかりを賞したりしに、後嵯峨天皇の嵯峨に離宮を設け給ふに及びて、そより眺めんがために、吉野の櫻を對岸の嵐山に移し植ゑさせ給ひしなり。其の離宮は後に禪寺に變りぬ。天龍寺これなり。

— 新體國語讀本 —

三運命

森田思軒

世の中の出來事の、來りて我等の運命を左右するもの、其の數、日に百千なるのみならず。然れども我等がこれを認め得るは、只其の表面に現れ實際に

結果を生ずる一半のみ。其の來らんとして來らず、殆ど己の上に附着せんとして遂に附着せず、其のまゝに消えゆく出來事はまた實に夥しからん。もし我等が暗々裏にこれらの出來事を認め得んには、我等の生涯の望と畏とは、まことに無限無邊ならん。Davidの事以て見るべきなり。

我等はDavidの既往を知らず、また知るを要せず。彼の履歴は小學校及び中學校にて、一どほりの教育を受けたりといふのみにて事足るべし。我等は今只二十歳の少年が始めて故郷の田舎を離れ、Boston府に行きて商家の手代とならんとする途上にある彼を見るのみ。田舎少年の心安さは、車も借らず、馬も借らず、日出より歩き出して、既に日中に至れり。時はこれ夏の半ば、漸く覺ゆる疲労と、益、加る暑熱とは、彼をしてかたへなる樹蔭に休息し、乗合馬車の來るを待ちて、これに投せんと決意せしめたり。

鬱葱たる幾株の喬木、丘の上に立並び、ほとりにはまた清らかなる泉の水の涌出づるあり。たとひDavidならずとも、往來の人誰か此の日中に此の樹蔭に遇ひて、一度慰ふことをおもはざらん。Davidはまづ泉の水に

仰臥
上をむいてね
ること。

微搖
かすかにうご
くこと。

陶然
愉快の情の心
中。に起るさ

恍惚
ま。中。に起るさ
る。うつとりす

熱睡
うまい

點々
ほつりく。

寓目
目をつける。

稱羨
ほめうらや

一讚一譏
むこと。

或はほめ或は
そしること。

渴きたる喉を潤し、徐に負ひたる包を解きおろして、其の上に粗末なる木綿の拭手を重ねかけ、これを枕として仰臥せり。太陽の光はうちかさなれる枝に遮られて、ダヴィッドの身に到らず。往來の路は昨日の大雨に潤ひたれば、少しも塵を飛さず、生ひ茂れる緑の草は、絶好なる蔭よりも快く柔なり。泉水は沸々として常に耳邊に鳴り、縦横せる枝はそよ吹く風の爲にをりく微搖す。ダヴィッドは忽ち心陶然として恍惚たるうちに、身はいつかうまいの裏に落ちぬ。

ダヴィッドは樹蔭に眠り居たるが、途上には或は馬に跨り、或は車に乗り、又或は歩みてダヴィッドの前を往來するもの點々たり。或者はわき目もふらず、過行けば、彼の此處にあることを知らざるなり。或者は偶、彼のこゝに横たはれるに寓目すれども、おのが心の忙しき思念に蔽はれて、別に心も留めず、過行くなり。又は彼の無邪氣に眠れるを見て、笑ひつゝ去るもあり。又は其の道傍に眠れるを卑しみて、眉擡めつゝ往くもあり。非難稱羨、一讚一譏、すべてダヴィッドの一身に集れり。

轆々
ころく。

ためつすが
めつ

いらくの向
からすかして
よく見るさま

低語す
にいふ。

容與
さやく。

やすらか。

やがて一輛のはでやかなる輕車の、毛色うるはしき二頭の馬を靡ぎ、轆々として馳來れるが、此の木立の前に至りて、突然とまたりたり。そは一本の轆弛みて、一箇の輪にくるひを生じたればなり。車中にありたるは商人夫妻にて、齡高く品よき人なり。老夫妻は從者が輪を繕ふ間、憇はんとて樹蔭に立寄りたるが、其の下にダヴィッドの横たはれるを見るより、俄に驚きて二三步あとにさがりたり。ためつすがめつ、しばし凝視し居たりしが、やがて心を安んじたりけん、此のうまいせる少年を驚かさざるやう忍足して、再び樹蔭に立寄りて、夫は妻に低語せり。あの心よげに眠れるさまを見よ。あの呼吸する氣息の極めて容與たるを見よ。これ健康にして心やすらかなるものならば、能はざるなり。もし余をしてかゝるうまいを得しめば、余は余が歳入の半ばを割くとも惜しからじ。妻は今風の爲に一方の枝の推しやられ、一條の太陽の光少年の面に漏れそゞくを見て、自ら手を伸べ、纏れたる枝を解き、これを蔽ひやりながら、また夫に低語せり。天は此の少年を我等に與へ給ふと見ゆるなり。我等が從弟の子の所行に失望せる後、偶然此の樹蔭に立寄りて、

邂逅 めぐりあふこと
Henry.

此の少年に邂逅したるは、まことに不思議ならずや。且熟視すれば、何となく面ざし逝きしヘンリーに肖たるやうなり。試に彼を喚醒さんか。と、夫はうち案じて、そは何の爲ぞ。我等はまだ少年の素性をも知らずして、といへば、妻も稍惑ひながら、尙も思ひ入りて、さりながら彼の無邪氣なる容貌、彼の無心に眠れる姿よ、といひぬ。

先立たせ
先に死なせ。

反復す
くりかへす。

忽焉 にはかに。
駒々然 ぐうぐういびきをかくさま。

今や一箇の莫大なる福はダヴィッドの上に臨めり。此の老夫妻はたゞ一人の子ヘンリーを先立たせ、家に蓄へたる巨萬の富を相續せさすべき者もなく、せめては遠き従弟の子にと目ざして、これを尋ねしに、其の子は所行不良にして心に適はず、今失望してポストン府に歸るなりけり。人はかゝる時に當りて、さまざまの想像をも畫かくものなり。妻は再び反復せり、試に喚醒さんか。と、同時に背後に従者の聲あり、修繕整ひて候。と。

老夫妻は此の聲に忽焉として我に復り、相携へて車上に身を置きけり。ダヴィッドはなほ駒々然たり。

老夫妻を載せたる輕車は去りてまだ一里は行かざるべしと思ふ時、また

贓物 ぬすみもの。

匕首 懐劍。あひくち。

胸に擬す 胸にあてがふ。

Brandi. 葡萄酒を蒸溜して製した火酒。

二人の人ありて、此の樹蔭に立寄りたり。木綿の頭巾を目深にかぶりたれば、審に見るべからざれども、顔の色いたく黒くして、衣服粗野に、且こゝかしこに幾多の汚點さへ印してあり。こはこれ此の邊に徘徊する山賊にして、今其の贓物を分たんとて、此の樹蔭に来れるなり。かくてダヴィッドの横たはれるを見るより、一人は早くも他の一人に、汝はあの枕にせる包を見すや。と、囁けば、されど若し目を覺したらば、といふを、一人は急に懷中を探りて、匕首の柄を少し露して、これのみ、といふやがて二人はダヴィッドのほとりに進み寄り、一人は其の匕首を抜きて胸に擬し、一人は頭の方にまはりて、其の枕とせる包を抽かんとす。此の二人の顔、若しダヴィッドをして目を開きて見しめば、直ちに以て悪魔とやなさん。此の時忽ち一頭の黄犬あり、鼻をうごめかして頻に地を嗅ぎつゝ、こゝに馳來れり。一人の賊は目早く之を見つけていへり、やめよ、やめよ、かの犬の主人次いでこゝに来るならん。と。

一人は匕首を懷中に藏めたり。一人はブランデー一壺を取出せり。仕事の將に成らんとして敗れたるを笑ひのゝしり、互に幾口かを飲むうちに、各黒

潮す
さす。

半残の夢
見のこりの
をちかた
遠方。
轆轤
鳴る音。
「こや御者云
云」
「上層に云々」
「顧眄の言」
「一目ふりかへ
つて見るこ
と。」

き顔に一種の紅を潮し來れり。後にはダヴィッドの事をば忘れて、がや／＼
とうち興じつゝ、相携へてまた出でゆけり。しかもダヴィッドはなほ駒々然
たり。
一時間の眠はダヴィッドの疲勞を醫し盡せり。ダヴィッドはすこし身動
せり。徐に其の唇を搖がせり。聲はなけれど、口の中にひとり半残の夢を語れ
り。をちかたに起る輪聲、既にして殷々、既にして轟々、益々近くして益々高く、今や
轆轤として尺寸の間に來れり。これ一輛の乗合馬車なり。ダヴィッドは俄に
躍り起てり。「こや御者、こゝに旅客あり。」上層に席あり。ダヴィッドは馬車の上
層に登り坐せり。ダヴィッドは前途幾多の望をかけたる樂しきボストン府
へ馳せゆけり。かの清泉には一顧眄の別をだになさずして。
一度は富の神の來りて、黄金の光其の水面に照射せることもありしを、ダ
ヴィッドは知らざるなり。又一度は死の神の來りて、其の水上に血を染めん
どせることもありしを、ダヴィッドは知らざるなり。嗚呼、彼は生涯遂にこれ
を知らざるなり。

四 ハンニバル

矢野龍溪

(一)名は文雄。政
論家。元改進黨
の名士。
千古傷心
千年の後まで
も心をいたま
しめること。
(二)Hannibal
古代北アフリ
カの都市カル
タゴの英雄。
(西暦紀元前
二四七—一八
三)
(三)Hannibal
畢生。
生涯。
終焉。
死ぬこと。
人生室家の
樂み。
家庭生活のた
のしみ。
尋常人
なみの人
間。
用兵の略
兵を用ふるは
かりごと。
文弱人
文事にのみ長
じてよわい
人。
非議
そしること。

英雄の成敗には千古傷心のこと少からずと雖も、東西古今を通じて、ハン
ニバルの事の如く悲しきはあらざるなり。幼齡九歳の彼が、其の父(一)に伴なは
れて神の卓前に立ち、國讐なるローマを畢生の敵とすべきを誓はしめられ
たるより、其の終焉に至るまで、一念常に國讐を報ずるに非ざるものなし。彼
は二十七歳、人生の花とも稱すべき時、大兵を帥(二)ゐて敵國に侵入せしより以
來十六年、苦を兵間に積み、曾て人生室家の樂みを享けたる跡なし。大功成る
に垂んとして果さず、ローマに窮追せられて、諸邦の朝廷に流寓し、終に毒を
仰いで斃る。嗚呼、人生の慘なる、復此の人の如きを見ざるなり。
若し彼をして尋常人ならしめば、亦深く悲しむに足るものなし。然れども
其の用兵の略は優に古今名將の上に出で、外交に敏に、政務に達し、賢に禮し、
士に下り、學を好み、民を愛す。彼は武ありて文なき粗暴家に非ず、文ありて武
なき文弱人に非ず。人格上一點の非議すべき所なく、而して其の末路かくの

傷心
心をいたまし
めること。
對峙
はり合ふ。
〔Carthago.〕

如し。是特に人をして傷心に勝へざらしむる所以なり。
地中海を隔て、南北に對峙するものはローマ、カルタゴの二共和國なり。
天は兩雄邦の並立を許さず、彼滅びずんば此興らず、彼衰へずんば此盛なら
ず。ロー人は戰鬪を事とする尙武の民なり、カ人は貿易を主とする平和の民な



ルバニソハ

り。カ人をして口兵と戦はしむるは、
羊を驅つて狼に向はしむるが如し。
況やハンニバルの事に當りしは、既
に其の國が一たび痛撃を受けたる
後なるをや。本國人の頼むに足らざ
るを知り、乃父の遺志を繼いで兵を
屬領に募り、之を以て強敵に當らん
とす。事固より既に非なり、彼豈之を知らざらんや。知つて而して是に出づる、
亦實に勢の已むを得ざるものあればなり。
彼が志を決して西班牙を發するに臨み、其の兵幾ど十萬と號す。然れども、

乃父
自分の父。

〔Pyrenæos.〕
佛國と西班牙
國境の山脉。
見兵
現在の手勢。

〔Gaul.〕

烏合
よりあつま
り。
將帥
大將。

ピレネーの峻嶺を越え、アルプの難路を過終へし時、其の兵已に四分の一に
減す。彼がローマの北野に進みし時は、見兵僅かに二萬五千に過ぎざるなり。
其の途上に於て兵士の怨嗟を聞くや、彼は寛大にも軍中に令して曰く、去ら
んと欲する者は去れ。從ふことを樂しむ者は來れ。此の時に當りて、將軍を
棄てんとする者數千人なりきと雖も、なほ二萬餘の兵は死生を共にせんこ
とを誓へり、而して其の兵は西班牙及びゴール北部諸種の蠻族より組成せ
るもののみ。決して夫の愛國心燃ゆるが如き口兵の比にあらざるなり。燕雜
烏合の此の兵に對して、恩威の大なるものあるにあらざるよりは、いづくん
ぞよくかくの如くなるを得んや。古今偉功を奏せし將帥を見るに、其の兵士
は多く統一せる國民にして、愛國心あるものにあらざるはなし。唯それハン
ニバルに至つては即ち然らず。其の將士は其の將軍に對して、單に恩威を感
ずるのみ、實に愛國の要素を缺けり。此の異様の兵を以て、彼の將來印度以西
を統一すべき運命を擔へる勇武絶倫、愛國無雙のローマ人に敵對し、一たび
は幾ど之を壓服せんとしたるなり。嗚呼、此の人の外、千古復此の人あらんや。

(1) Alexander the Great. (2) 王。前三五六一三 (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十) (十一) (十二) (十三) (十四) (十五) (十六) (十七) (十八) (十九) (二十) (二十一) (二十二) (二十三) (二十四) (二十五) (二十六) (二十七) (二十八) (二十九) (三十) (三十一) (三十二) (三十三) (三十四) (三十五) (三十六) (三十七) (三十八) (三十九) (四十) (四十一) (四十二) (四十三) (四十四) (四十五) (四十六) (四十七) (四十八) (四十九) (五十) (五十一) (五十二) (五十三) (五十四) (五十五) (五十六) (五十七) (五十八) (五十九) (六十) (六十一) (六十二) (六十三) (六十四) (六十五) (六十六) (六十七) (六十八) (六十九) (七十) (七十一) (七十二) (七十三) (七十四) (七十五) (七十六) (七十七) (七十八) (七十九) (八十) (八十一) (八十二) (八十三) (八十四) (八十五) (八十六) (八十七) (八十八) (八十九) (九十) (九十一) (九十二) (九十三) (九十四) (九十五) (九十六) (九十七) (九十八) (九十九) (一百)

獨り人品のみならず、其の戦闘に長すること亦古今無雙なり。アレキサンダー、ブレデリック、ナポレオンと雖も、其の上に出づるを得ず。是余の私評に非ず。歐洲史家の通論なり。我が兵と敵兵と強弱勇怯、既に懸絶せるのみならず、敵は毎に大兵にして、我は毎に寡兵なり。然るに猶奇戦には謀略を用ひ、正戦には戦術を用ふ。有名なるカンネの大戦を見よ。彼の兵數は敵軍の半ばにも當らざりしに非ずや。しかも堂々たる正戦に於て、彼は巧妙なる戦術を用ひ、敵軍をして七萬の死屍を戦地に遺して潰敗せしめたり。此の如き全勝は、歴史上實に稀有の事なりとす。戦地に斃れたるローマ貴族の指より集めたる金の指環數斛を、彼の使が本國に齎し歸りて之を國會に示せる時、其の國人の驚喜は幾何なりしぞ。此の大勝に乗じて直ちにローマを衝かざりしは、後人の憾む所なりと雖も、其の兵やもと甚だ多からず、加ふるに戦後の疲憊を以てす。此の危道を行かずとも、一方にて伊太利南部の城邑は皆遙かに、我を送る勢あり、彼を捨て此を取る、亦理なしとせんや。此の戦の夕、一部將が、我に三千の騎兵を與へよ、將軍の爲に直ちにローマを衝き、二日を出でずして

獻策 是はかりごとをすしめるこ
金穀 軍用金と兵糧
操縦 小和少の間の平
釐革 釐とのへあらためること
涵養 やしなふこと
國幣 國幣
急を緩め 急を緩め
講策す 講策す
法をたてること 法をたてること
武士 武士

軍をローマの城中に晩食せしめん。と獻策せし時、彼既に其の得失を知る、必ずしも後人の非議を俟たざるなり。彼の國人は必要大切な場合にも、曾て十分の援兵を彼に送りし事なく、十分なる金穀を彼に與へし事なし。これ彼が十六年間敵國を蹂躪しながら、遂に其の成功を最後に誤りし大原因なり。實に本國人民の罪にして、彼の罪にあらず。斯の如くにして彼は十六年間自ら兵を他國に募りて其の缺を補へるのみならず、其の金穀も常に之を敵國に取れり。其の忍耐の大なる、亦其の智略と並行すと謂ふべし。彼は善く戦へり。彼は巧に外交を操縦せり。然れども其の本國は却つて敵の侵入を防ぎ得ず。勢の救ふべからざるに及んで、彼を召喚して之に當らしむ。嗚呼、亦遅し。彼の智勇も之を如何ともする能はず。しかも猶此の存亡の秋に在つて、敵と講和の約を結び、國人をして小康を得しめ、一方には財政を釐革し、一方には憲法を修正し、下層人民の愛國心を涵養し、國幣の急を緩め、莫大なる償金を年々支辨し得る途を畫策せり。彼豈尋常の一武弁ならんや。彼

治平 國を治め天下を平かにすること。
 (一) Hadrubal. (一四世紀元前二〇七)
 衰邦 おとろへた國、即ちカルタゴ。
 久瀾の喜云 久しぶりであつた喜をのべ云。

(二) 唐の詩人杜甫の句。
 (三) 陝西省鳳翔縣の地名。諸葛亮の本營のありし處。
 (四) 諸葛亮。字は孔明。蜀漢の忠臣。
 (五) 今の浙江省杭州府。
 (六) 岳飛。宋の忠臣。
 眩耀す まぶしくくらませる。

をして平時に出でしめば、必ずや治平の良宰相たらん
 其の未だ本國に召喚せられずして、ローマの野に轉戦するや、兵寡く、食竭く、恢復の望は、單に懸りて其の實弟ハスドルバルが西班牙より援軍を率ゐて來り合するにありしなり。然るに天は衰邦に祚せず、彼の弟は伊太利の北野に破られ、彼が手を握りて久瀾の喜を叙せんと樂しみたる其の人の首級は、敵の槍鋒に貫かれて、遙かに彼が營前に現れたり。嗚呼、人生悲惨のこと多しと雖も、未だ此の人の此の時の如きはあらざるなり。

彼が遙かに弟の首級を望みける時、我今カルタゴの運命を知れり、と歎せし一言は、如何に無限の悲痛を含みしぞ。尋常骨肉の情よりするもなほ忍ぶ能はず、況や自國の興亡は此の援軍の勝敗に懸りしをや。史を讀んでこゝに至り、卷を掩うて長歎せざる者果して幾人かある。出師未捷身先死、の五丈原頭の武侯や、盡忠報國の黥文を露して餘杭の市に斬られたる岳武穆も、亦何ぞ比するに足らん。

彼の戰略戰術が人目を眩耀するが爲に、人或は其の名將たるを知つて、其

の人格を察せず。若し能く之を究めば、其の不幸を悲しむ情、轉、深きを加へん、千古傷心の事實に此の人の一生の如きはあらざるなり。—— 出鱈目の肥——

五 熱帯の海

(一) 島崎藤村

船は印度の南端を過ぎた。時とするに驟雨が印度洋へ來た。それが我々の甲板へ吹込んだ。合奏のやうな海の音も聞えた。雨後は殊に蒸暑い。熱を帯びた白い雲が行手の空に起つて、そこにあるものは永遠の眞夏かと疑はせた。コロンの近海で見た漁船の影も隠れた。ふと波の間に一艘の汽船が見えた。我々の甲板から其の汽船を認めたものは、いづれも欄のところに立つて眺めた。

「あゝ、日本の船では無いか。」

と私は自分で自分に言つて見た。其の二本の檣、其の一本の煙筒、我々の乗船に比べると、自ら構造を異にした其の黒い船の形、みな見覺のあるものであつた。

(一) 名は春樹。信濃木曾の人。詩人、小説家。

行手 行く方向。前方。
 (二) Colombo. コロンボ島の首府。

(1)Marseilles.
佛蘭西南部の港。

(2)Ernest
Simon.
佛國郵船の名。本文筆者の乗船。

繪卷物
繪と詞とをか
はる人、書いた
卷物。

(3)Singapore.

私は艦の方の太い綱の積んである甲板の上へ走つて行つた。そこから船を望まうとした。神戸出發以來、我々の船と前後して、マルセーユへ向ふ郵船會社の汽船があつたから、波間に見えるのも其の船らしく思はれた。貨物を積むことの割合に少なくて速力の多く出るエルネスト・シモンは、見る間に其の船に追付いた。遠く離れて來た自分の國を一つの船にして見せてくれるやうな其の形が、宛も繪卷物のやうにして私の眼前にあつた。私は青く光る波を隔て、向ふの甲板に集る人の影までも望むことが出來た。果してそれが同胞であるや否やを見定めることは出來なかつたけれども、私は頻に自分の帽子を振つて見た。

間も無くエルネスト・シモンは、其の船を遠くうしろに残して進んで行つた。海はまた沙漠のやうな空虚に還つた。鳥一羽、船一艘、何一つ眼に入るものも無かつた。我々の船が新嘉坡を離れた頃は、まだそれ程にも思はなかつたが、⁽³⁾印度の南端も過ぎ、コロンボも早うしろになつた時、何と無く私も心寂しさを感じて來た。故國の消息が絶えたことも既に二十二日であつた。

油を流す云云
ごくおだやかな海。
幾趣幾様
いろ／＼さまざま。

皮膚の色
乗客の大部分は白色人種であるのに、自分分は黄色人種ゆゑにいふ。

船は亞刺比亞の海へ入つて行つた。そこには油を流したやうな海があつた。ごろりとした青い波は、幾趣幾様かの渦と皺と紋とを描いて見せた。白い雲の影が海に映る程の晴れた日で、其の静かさは熱帯らしい静かさであつた。どうかすると海は蛇のやうな肌の滑さをも見せた。私はまた波間にむれ飛ぶ銀色の飛魚をも見て行つた。未だ曾て望んだ事も無いやうな、夕日に燃える火の海をも見て行つた。

夕風の楽しさに、大船の甲板ではみな思ひ／＼に集つて、涼み話を持寄つてゐた。私はもう自分の皮膚の色の異なつて居ることなどをさ程感じないで、皆の涼み話に耳を傾けてゐた。

「失禮ですが私はMといふ者です。コロンボから此の船に乗つて參つたものです。」

と其の時私の側へ來て名刺をくれた日本の絹商があつた。こんな外國人ばかりの中でめづらしい同胞に遭つて、國の言葉で話が出来ようとは、全く私も思ひがけないことであつた。

痕跡
あとかた。

先蹤
先のもの、通
つたあと。

明けても暮れても私が眺めて行つたものは海だ。
日の光は亞刺比亞の海に満ちてゐた。人を避けて私は海を見に行つた。
一切を忘れさせるものは海だ。

躍れ。躍れ。海よ、躍れ。舷に近く白い大きい花輪を見るやうな、また白い花束
を見るやうなのは、我々の船から起す波の泡であつた。忽ち其の泡が近い波
の上へ擴つて行つて、星のやうに散亂れて、やがて痕跡も無く消えて行つた。
私は遠く光る海のかなたに、無数の魚の群かとも思はれる波の動搖をも認
めた。

條理も無く、筋道も無い海。先蹤も無く、標柱も無い海。豊富で、しかも捉へる
ことの出来ないやうな海。何處を出發點とも、何處を結末ともいひ難いやう
な海。私の眼に映るものは唯日の光であつた。波の背に反射する影であつた。
藍色の波の上に浮きあがつて、やがて消えて行く泡であつた。波と波と相撃
つて時々あがる水煙であつた。光と熱と波とは殆ど一つに溶合つて、私は自

巻きつゝあ
る云々
此の一節は海
のさまよひに
變化する有様
を述べたので
ある。

水平線
遠く海水と天
と相接するや
うに見える
線。

分のからだまで、其の中へ吸はれて行く思をした。

大船の心安さ。私は波打際の砂の上に身を置いてゐるやうな、海から離れ
た安らかな心持を以て、而も岸にゐては窺ふ事の出来ない海の懐をまのあ
たりに近く見て行つた。

巻きつゝある。開きつゝある。涌きつゝある。起りつゝある。奔りつゝある。放
ちつゝある。延びつゝある。狂ひつゝある。亂れつゝある。競ひつゝある。溢れつ
つある。醸しつゝある。流れつゝある。上りつゝある。轉びつゝある。陥りつゝあ
る。渦巻きつゝある。波は波の中に滑り入りつゝある。揺れつゝある。震ひつゝ
ある。觸れつゝある。撃合ひつゝある。混り合ひつゝある。吐きつゝある。逆立ち
つゝある。連りつゝある。續きつゝある。我と我が身を恣にしつゝある。

長い廊下のやうな甲板から眺めると、少し斜になつた欄の線が、恰も遠い
水平線とすれ／＼になつて、或は水平線の方が高くなつたり、或は欄の線
の方が高くなつたりするやうに見えた。どうかすると青い深い海は、其の板の
間まで、波の動搖に身を任せてゐた私のすぐ足許まで這上つて来るやうに

も見えた。

六 帝國青年のために

山 縣 有 朋

謹啓。時下益々御清適慶賀此の事に存候。さて先般田中參謀次長貴管下地方へ旅行相成候由にて、過日面會の節、種々近狀並びに貴下御盡瘁の模様をも承り及び候殊に青年團に關しても一方ならず御配慮の趣、老生に於ても蔭ながら喜び居候次第にて、なほ此の上とも一層の御盡力を希望致候。申すまでもこれ無く、今次の歐洲大戰終了の後は、全世界に亘り精神上、物質上非常なる變化を來し、我が帝國に於ても、直接間接に其の影響を被るべきは明白の事にこれ有り、右に就いても、將來帝國を擔ひて立つべき青年には、確乎たる決心と覺悟とを要すべく、今日より豫めこれを指導鍛鍊する要あること、今更多言を要すまじく候。

世界大戰の原因は種々これ有るべく候へども、要するに國民民族の競争の結果に外ならず、而して此の競争が、今次の大戰に依り中歐の天地に於て

(一)當時の山口縣知事林市蔵に與へた手紙。(二)陸軍大將、元帥、公爵。(三)陸軍大將男爵田中義一。盡瘁。力をつくし心を勞すること。一方ならず。非常に。

今次。このたび。中歐。中央歐羅巴。

(一)東方の亞細亞等。即ち日本支那國難を醸成す。國家の危難をひきおこす。交戦の地域。實際戦つて居る土地。千載の悔。千年後までの悔。即ち永久つかぬ悔。列強。もろくの強國。交渉を有す。外交上の關係を有する。難局。こんなな場合。一再ならず。一度や二度でない。千古の聖帝。千古に稀な聖賢宰。賢宰。籌謀。賢宰。はかりごと。伍す。相ならぶ。

解決を告ぐると否とに拘らず、次に起るべき競争は、必ず東亞の地を中心と致すべきは、避くべからざる必至の情勢と存せられ候。尙之を想像するに、其の競争は政治上、經濟上種々なる形式を以て顯れ、勢の赴く所、國難を醸成するまでに立至るものと、覺悟せざるべらざる儀と存候。幸に今次の大戰に當りては、帝國は遠く交戦の地域を離れ、直接の害毒を被ること少しと雖も、戦後の競争に關しては、直接に波瀾を被り、此の間若し一步を誤らば、邦家千載の悔と相成るべく、實に容易ならざる時期と相考へられ候。

近世帝國が列強と交渉を有するに至りたる以來、五六十年間の事を追懐するに、非常なる難局に遭遇せし事一再ならず、今日より之を想ふに、尙心膽の寒きを覺ゆる事もこれ有り、此の間に處し幸に難局を披き、國運の伸張を見たるは、殆ど天佑とも申すべく、上に千古の聖帝を仰ぎ、下忠誠の國民あり、幾多の賢宰、良將籌謀宜しきを得、相俟つて此に至りたるは、勿論ながら、又當時帝國は列強の間に伍し、其の地位必ずしも今日の如く重要ならざりしにも因るべく候。然るに今日に至りては、帝國は事實上諸列強と伍を同じく

覇を争ふ
最大権力たら
んと競争す
る。
當路
その路の要所
にあたるこ
と。
高木風に當
る
高い木には風
が當る。
基礎棟梁
建物の土臺や
むな木やうつ
ばり。

宰相
内閣大臣。

するに至りたるのみならず、今後列強が東亞の天地に覇を争ふに當りては、帝國は彼等に取りては重大なる競争者にして、又當路の大障害なれば、事に當りて困難を感じる度も、昔日に比し幾層倍するは明らかなるべく候。高木風に當るの喩の如く、帝國の地位は戦後に起るべき大颶風の衝に當る高樓とも申すべく、基礎棟梁は勿論、戸障子の末に至るまで、寸分の弛み無きに非ざれば、能く此の大風を凌ぎて全きを保つこと能はざるべく、之を想へば、日夜枕々憂に堪へざる次第にこれ有り候。此の來るべき狂風怒濤の日に、帝國の運命を託するものは、實に帝國青年の外他にあるべからず候。御承知の如く、今日に於て國運の進展は、一二宰相の指導にのみ依るべからず、又單に陸海の兵力にのみ頼るべからず、國民を舉げ國力を盡し、所謂上下一統、舉國一致の力に倚らざるべからず、精神上はた物質上、各種の方面に青年努力の要は益々重大にこれ有り候。此の意義に於て、老生は各地に青年團の設置せられて修養に従ふを喜ぶと共に、又益々改善進歩して、眞に國家に資する所あらんことを希ふ次第にこれ有り候。

牧民の官
知事のこと。
民を治める官
の意。
誘掖
みちびきたす
けること。
成果
結果。
宿願
かねてのねが
ひ。

時宜次第
其の時の都合
次第。

貴下恰も此の時勢に際し、牧民の官として、指導誘掖の事に當られ、熱心從事せらるゝを聞き、欣喜の情に堪へず、偏に成果を舉げられん事を切望致候。これ實に老生が帝國の前途の爲己み難き宿願にこれ有り候。老生齡既に八十歳を超え、今後帝國の爲に盡す餘命幾何も無し、唯々將來ある青年に帝國の前途を依頼するの外これ無く、老生の眞意御推察下され度候。草々

—帝國青年—

七 西郷南洲遺訓

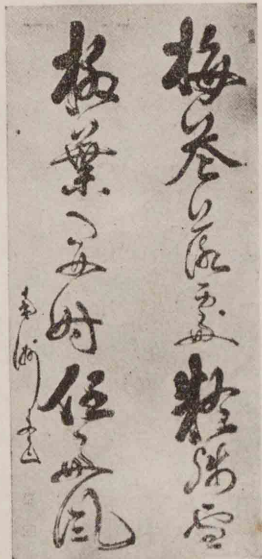
事大小となく、正道を履み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて一旦其の差支を通せば、後は時宜次第工夫の出来るやうに思へども、策略の煩きつと生じ、事必ず敗るゝものぞ。正直を以て之を行へば、目前には迂遠なるやうなれども、先に行けば成功は早きものなり。身を修むるに克己を以て終始せよ。總じて人は己に克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るゝものぞ。よく古今の人物を見よ。事業を創起

驕矜
おごりたかぶ
る。

梅花落處
疑殘雪
柳葉開時
任好風
南洲書

詮もなき
やくに立た
ぬ。

する人大抵十に七八までは能く成し得れども、残り二つの終まで成し得る人は稀なり。始はよく己を慎み、事をも敬する故、功も立ち、名も顯るゝなり。功立ち、名顯るゝに隨ひ、いつしか自ら愛する心起り、恐懼、戒慎の意弛み、驕矜の氣漸く長じ、其の成し得たる事業を、負み、終に敗るゝものにて、皆自ら招くなり。故に己に克ちて、睹す聞かざる所に戒慎すべきものなり。



四郷南洲筆蹟

べし。過を改むるに自ら過てり、とだに思ひつかば、それにてよし。其の事をば棄て、顧す、直ちに一步踏出すべし。過を悔しく思ひ、取繕はんとて心配するは、譬へば茶碗をわり、其の鬩を集めて合せ見るが如く、詮もなきことなり。命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大事は成し得られぬなり。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬ

道を行ふ者は、天下舉つて毀るも足らずとせず、天下舉つて譽むるも足れりとせず。自ら信すること厚きが故なり。

天下後世までも、信仰悦服せらるゝものは、唯これ一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人、其の數舉げて數へ難きがなかに、獨り曾我兄弟のみ。今に至りて兒童、婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤きが故なり。誠ならずして譽めらるゝは、僥倖の譽なり。誠篤くば、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。

今の人才、識あれば、事業は心次第に成さるゝものと思へども、才に任せて爲す事は危くして、見て居られぬものぞ。體ありてこそ用は行はるゝなれ。

體
實物。
活用。

僥倖
まぐれあた
り。

三訂帝國讀本卷五終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。本)

劔	剪	刃	函	減	涼	準	況	決	冒	免	免	佞	仞	兩	通用正		
劍	翦	刀	函	減	涼	準	況	決	冒	免	免	佞	仞	兩	通用正		
寃	墻	塚	場	噴	噐	唇	叙	収	厨	卿	鄉	即	効	通用正			
冤	牆	冢	場	噴	噐	唇	敘	敘	厨	卿	鄉	即	効	通用正			
拔	拏	戲	懺	懃	慨	恒	往	稟	屏	并	帽	尅	寶	寇	通用正		
拔	拏	戲	懺	懃	慨	恆	往	廩	屏	并	帽	剋	寶	寇	通用正		
濱	溫	冰	藏	欸	概	桿	晉	昂	既	整	攜	攢	攢	插	通用正		
濱	溫	冰	藏	欸	概	杆	晉	昂	既	整	攜	攢	攢	插	通用正		
盃	鼓	癡	畧	畱	畫	瑣	玄	貓	猪	猿	熔	陰	潛	濶	通用正		
杯	鼓	癡	略	畱	畫	瑣	玄	貓	猪	猿	鎔	陰	潛	闊	通用正		
續	續	紀	穀	粘	籤	纂	節	笄	竊	秘	頤	穎	稟	研	通用正		
續	續	紀	穀	黏	籤	纂	節	笄	竊	祕	頤	穎	稟	研	通用正		
厠	勅	冲	倣	俟	京	亡	並	万	聿	耻	羹	群	罰	經	織	通用正	
厠	敕	冲	倣	埃	京	亾	並	萬	聿	恥	羹	羣	罰	經	織	通用正	
婚	姉	妍	妊	野	坂	囁	叶	厮	同	艷	館	舖	阜	致	腸	豚	通用正
婚	姉	妍	妊	埜	阪	囁	協	厮	字	艷	館	舖	阜	致	腸	豚	通用正
考	慙	富	忘	庵	鳴	峯	峩	岳	表	解	霸	褒	衛	蔭	萌	莽	通用正
攷	慙	富	忘	菴	島	峰	峨	嶽	表	解	霸	褒	衛	蔭	萌	莽	通用正
概	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	表	賈	贊	賓	象	讎	讎	讎	通用正
槩	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	表	賈	贊	賓	象	讎	讎	讎	通用正
砧	睹	狸	貉	無	烟	汙	毘	朴	表	隸	隙	間	鎖	隣	輒	軟	通用正
礎	覩	狸	貉	无	煙	汚	毗	樸	表	隸	隙	間	鎖	鄰	輒	輒	通用正
縹	縹	網	紕	糾	紕	紕	紕	稿	表	鬱	鬱	鬱	鬱	鬱	鬱	鬱	通用正
縹	縹	網	紕	糾	紕	紕	紕	稿	表	鬱	鬱	鬱	鬱	鬱	鬱	鬱	通用正

附錄

羈 船 羈
 籠 船 籠
 花 華 花
 荒 荒 荒
 虱 虱 虱
 譁 譁 譁
 嘩 嘩 嘩
 蹢 蹢 蹢
 躡 躡 躡
 鏤 鏤 鏤
 鏞 鏞 鏞
 鏞 鏞 鏞
 駟 駟 駟
 驅 驅 驅

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラルモノ
 *標ヲ附シタル文字ニ限リ、モノ
 ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ
 慣用ニ從
 中略字

巨 互
 恒ニ同シ。
 笨ニ同シ。アラシ、鹿、粗。
 カラダ。
 ママシ、タマ。「但馬」
 ツタナシ、拙劣。
 ミダリガハシ、猥。
 身分ヲ越エテオゴル。「僭越」
 カブト、兜。「甲冑」
 ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」

協 協
 カナフ、叶。
 ガビヤカス、脅。
 サス。「刺殺。刺客。名刺」
 モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」
 星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。台覽。台臨」
 ウテナ、ダイ。
 後 後
 ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
 キミ。「皇后」
 商 商
 アキナヒ。
 モト、本。
 ツボ。
 ミチ、宮中ノミチ。
 ツ、シム。
 ヒメ。

託 託
 拓ニ同シ。オス、ヒラク。
 ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。
 ハラフ。又アグ。
 ニナフ、カツグ。
 鬼ヲ追フトイフ屋ノ神。
 アラタム。
 ヤリ。
 鏞ニ同シ。鏞ノ聲ノ形容。
 アグビ。「欠伸」
 カク。「缺席」
 *ソイト、細絲。
 イト。
 支那ノ地名。
 ウラヤム。

蟲 虫
 魚介類ノ總稱。又ママシ。
 △シ。
 ロビ、ロブ。「詔狀」
 詭ニ同シ。アザムク。
 ヘツラフ。
 ウタガフ、疑。
 証 證
 アカシ、シルシ。「證明」
 イサム、諫。
 禮ノ古字。
 エタカ。
 マテ。
 エグ、行。
 エラブ。(ヨリトル)
 エラブ。(書物ヲ編纂ス)

卻^キ 卻^キ 卻^キ
 シロ、隙。
 シリゾク。「退卻」
 キタフ。「鍛鍊」
 シコロ、「鍛」

宛字 (左の如き字は假名を
 使用するをよしとす)

おぼつかなし 覺束なし
 かひ (詮の意) 甲斐
 きつと 屹度
 さすが 流石、遺
 しまふ 仕舞ふ
 せつかく 折角
 だけ 丈
 だめ 駄目
 ちやうど 丁度
 ちよつと 一寸、鳥渡

でたらめ 出鱈目
 とうく 到頭
 とかく 兎角、左右
 とて、とても 迎
 とにかく 兎に角
 なかく 中々、却々
 ふるまひ 振舞
 はかなし 果敢なし
 ほんたう 本當
 むだ 無駄
 むづかし 六ヶし
 やたら やはり 矢鱈
 やはり 矢張

附録終

大正十一年一月十四日訂版發行
 大正十一年十二月十四日訂版發行
 大正十一年十二月十四日訂版發行
 大正十一年十二月十四日訂版發行
 大正十一年十二月十四日訂版發行
 大正十一年十二月十四日訂版發行
 大正十一年十二月十四日訂版發行

價	定	三訂帝國讀本
卷一、二、三、四、各金四十五錢	卷一、二、三、四、各金四十五錢	卷一、二、三、四、各金四十五錢
卷五、六、各金四十五錢	卷五、六、各金四十五錢	卷五、六、各金四十五錢
卷七、八、各金三十七錢	卷七、八、各金三十七錢	卷七、八、各金三十七錢
卷九、十、各金三十六錢	卷九、十、各金三十六錢	卷九、十、各金三十六錢
大正十二年時定價	大正十二年時定價	大正十二年時定價
卷一、二、三、四、各金七十七錢	卷一、二、三、四、各金七十七錢	卷一、二、三、四、各金七十七錢
卷五、六、各金六十八錢	卷五、六、各金六十八錢	卷五、六、各金六十八錢
卷七、八、各金六十三錢	卷七、八、各金六十三錢	卷七、八、各金六十三錢
卷九、十、各金六十一錢	卷九、十、各金六十一錢	卷九、十、各金六十一錢

著作權
 所有

發行所

東京市神田區
 通神保町九番地

合資

富山房

長電話神田三〇一四・三七六〇番
 振替口座東京五〇一番

著者 芳賀 矢
 發行所 東京市神田區通神保町九番地
 合資 富山房
 印刷者 坂本 嘉治 馬
 代表者 合資會社富山房社長
 印刷者 合資會社 富山房
 印刷者 合資會社 富山房



